上地の風（第三号）

続 ふるさと上地

岡崎市立上地小学校

上地の風（第三号）

続 ふるさと上地

岡崎市立上地小学校

はじめに

ふるさとの山に向ひて言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

これは有名な石川啄木の歌ですが、だれにもこのような思いがあり、時にはこれが生きる支えにもなります。

上地が「第二のふるさと」という方も、保護者の中には大勢おられます。しかし、今、上地小学校に学ぶ子どもにとっては、この地が正真正銘の「ふるさと」になるのです。

私たちは、「ふるさと創生論」を待つまでもなく、啄木の歌にあるようなふるさとづくりを推し進めていきたいと思います。もとより、この仕事は、一学校だけではとうていできるものではありません。学区の皆様のご理解とご協力によって永い年月をかけて創りあげていくものだと思いますが、その礎となればと念じ、この冊子に取り組みました。

本年度も微力ではありますが、本校職員や学区の先輩各位の手で上地学区の歩みや貴重な伝説を調査してみました。まだまだ調べは始まったばかりですが、今日までのものをまとめてみました。すでに一部は「月刊一学校だより」として発表したものもありますが、お読みいただいてご教示くだされば有難いと存じます。

終わりになりましたが、本書をまとめるに当たり、市議会議員渡辺五郎氏、総代会長成瀬司氏、社教委員長柴田勝氏、区画整理組合の加藤利吉理事長、畔柳八百吉理事長、上地町前総代会長佐藤益荒氏はじめ多数の方々に格別のお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

平成元年三月

岡崎市立上地小学校長　嶋田　稔
岡崎市立上地小学校ＰＴＡ会長　市村　敏道

目次

はじめに……1
一、ふるさとシリーズ
一、長命地蔵を訪ねて……5
二、若松東の野鳥物語……8
三、上地の水はおしいぞ……11
四、上地の雑草探訪（その1）……15
五、上地の雑草探訪（その2）……22
六、岡崎医療刑務所を訪ねて……33
七、己を犠牲に人命救助……41
八、花崗岩の上に建つ上地小学校……46
九、奥山田池物語……55
十、絵からぬけだしたトラとりゅう……57
十一、「春の七草」採集……62
十二、上地八景……67
二、校長通信
一、キミは虹を見たか……77
二、虫よ、鳥よ、メリーよ、安らかに眠れ……79

三、雪の上の小さなあしあと……81
四、ガーデンプールに上がる歓声……84
五、おかあさんおみやげだよ……86
六、十一人の友だちを迎えて……89
七、おっかさんの涙……91
八、心をつなぐ修学旅行……96
九、笑顔で実行……102
十、ムツゴロウ少年との交流記……104
十一、トラとりゅうがおどった……110
三、教室の窓
一、プレハブ教室雑感……117
二、給食大好き……118
三、教師と子どもの距離を思う……120
四、サンバイ　ブルジュンバ　ラギ……122
五、今夏最高の汗を流した部活動……125
六、二年生の夏休み……128
七、タイの子どもと上地っ子……130
八、仏壇作りを学習して……133
九、社会見学で見た子どもたちの目の輝き……136
十、三学期の係決め……139
十一、初めての学芸会に大喜び……141
十二、出会い、そして、別れ……143

四、学校ニュース
一、新しい担任と共に八九九人が船出……145
二、チャボ一家にヒナが誕生……146
三、百年前の上地学校鬼瓦……148
四、バレー部ついに全国の舞台へ出場……149
五、上地っ子「力いっぱい」の大奮戦を展開……151
六、「来年度予算化に明るい見通し」……155
七、「創意」と「熱演」の秋季大運動会……156
八、「雑草コーナー」が誕生……158
九、「上地よもぎもち」作りに六十人……160
十、小田裕司君、安らかに眠って下さい……163
十一、川野さん宅全焼に上地っ子の友情集まる……165
十二、「チェリー二世」誕生で迎えた平成元年……167
十三、おばさん、荷物提げさせて下さい……169
十四、柴田誠教頭先生が急逝……171
五、寄稿
一、上地焼きの会に参加して……177
二、「学校だより上地」を読んで……179
三、羽ばたけ、上地っ子……181
四、私の好きな言葉……184
あとがき……186

一、ふるさとシリーズ

一、長命地蔵を訪ねて

上地町四区（上地町字屋敷三十番地）に三善寺があります。「上地は、むかし、山が多く、雷がよく落ちて困っていた。ところが、三善寺にお地蔵さんがやってきてから、雷や火事による被害がなくなったという。」学校を訪れる方たちからこんなことを耳にしたのは、昨年度「ふるさとシリーズ」を発行し始めた頃でした。そこで、今年度最初のこのシリーズで早速三善寺の「長命地蔵さん」を取り上げることにしました。

二善寺は十代前の「早川家」が寄進

四月一日（金）の午後、上地町下屋敷の早川博さん宅を訪ねました。三善寺は「早川さんの先祖が建てたのではないか」という話を聞いていたからです。

早川博さんは、今年七十四才で以前は愛知県半田市の職業安定所の所長も勤められた方です。ご仏壇に保管されている「早川家の家系図」を手にして、こんなふうに話して下さいました。

「先祖代々の位牌とこの家系図を照合して調べた結果、私から数えて十代前の武左衛門が元録十二年（一六九九年）に三善寺を寄進しています。当時、この地方の百石の奉行職でした。上地早川家の初代は寛文年間（一六六一～一六七三年）に当地にやってきていますので、私は十二代目です。

今から約三百年前のことになります。三善寺建立のいきさつが判明したことから、「長命地蔵」さんが寺にまつられた時期も推察することができ、貴重なお話になりました。

早川　博さん

伝説「長命地蔵さん」

上地の村は、その名のように「上」の「地」、高い所という意味があります。高いためか、夏になると、雷がよく落ちて、村の人たちは困っていました。そんなある時、六部（ろくぶ－全国六十六箇所の霊場を歩く巡礼の僧－）がお地蔵さんを背負って通りがかりました。入道雲が綿菓子のように、もくもくと出ている真夏の暑い日でした。六部の顔からは汗が流れ落ちていました。

と、ちょうど、上地の三善寺の近くまで来ると、空が真っ黒な雲におおわれ、雷鳴と同時に大粒な雨が降り出しました。六部は大急ぎで三善寺の境内に走り込み、本堂の前で雨宿りをすることにしました。しばらくすると、ようやく雨が上がり、きれいな虹が萱圍（かやぞの）の方にかけて姿を現わしました。さてと、六部がお地蔵さんを背負って立ち上がろうとすると、どうしたことか、いくら力を入れても動きません。仕方なく、その晩は三善寺に泊めてもらうことにしました。いつの間にか、旅の疲れから眠り込んでしまいましたが、「ロクブ、ロクブ」と呼ぶ声に目を覚ました。見ると、枕元にお地蔵さんが座っています。そして、びっくりして、口を開けている六部に話されました。「実は、この上地に、昔私を世話してくれたお方が住んでおられる。だから、私はこの上地に住んで、この村の人たちの役に立ちたいと思う。上地は、雷がよく落ちて、それが元で火事が起きて困っていると聞いている。この雷による災害を防ぐことにしたい。」

六部が「よく分かりました。私から、村の人たちに話しましょう。」と答えると、お地蔵さまの姿がスーッと消えてしまいました。こうして、お地蔵さんが、三善寺にまつられることになり、それ以後、上地での雷の災害がめっきり減ったということです。

長命地蔵

三善寺本堂

「大火事になったことがありません」

四月五日（火）の午後、近くに住む五年生の成瀬晋君と六年生の成瀬真樹郎君と一緒に三善寺を訪ねました。ちょうど、ご住職の笹尾宗秀さん（四十三才）とお母さんの妙子さん（六十四才）がおられ、お地蔵さんについてお聞きすることができました。

「お地蔵さんをご本尊としてお迎えしたのは、三善寺ができて間もなくということですから、今から三百年近く前です。おっしゃるように、長命地蔵さんは雷や火事から上地を守って下さっています。境内の大木に雷が落ちたり、第二次世界大戦の岡崎空襲で焼夷弾が落ちたりもしましたが、大火にならずに済んできました。寺の近くの方も、夜中にお地蔵さんの声で起きたら、灰捨て場が真っ赤になっていて火事寸前で被害をまぬがれたと喜んでいらっしゃいます。今でも、毎日、信心深い方たちがお寺に来て、お参りしていかれます。」

早川博さんの妹さんに当たる妙子さんが、三善寺に代々言い伝えられてきたことを思い出しながら時間を忘れて熱心に話して下さいました。同行していた、晋君と真樹郎君が「先生、ご本尊の長命地蔵さんのお姿が見せてもらえるのかね。」と、ささやきました。

「よし、いいよ。本当は一年に一回だけになっているけど、上地小学校のよい子のことだ。お地蔵さんも許してくれるでしょう。」

ご住職さんとお母さんのご好意で合掌させていただくことができました。丁重にお礼を申し上げて帰る途中、真樹郎君が言いました。「ぼくの家のコンクリートブロックの火薬庫の近くの大木に雷が落ちて、電気が地面をはってきてテレビがショートしたけど、不思議と火事にならなかったって、お母さんが教えてくれたよ。」長命地蔵さん、ますます健在のご様子です。

上地小学校　松原　晄三

本堂内で成瀬君たち

二、若松東の野鳥物語

まだ上地が開発途上の頃、この学区に転居して来られた斎藤かをるさんから次のような便りを頂きました。「学校だより」編集部が「若松東の野鳥物語」と名付けて、ここに紹介します。

野鳥の楽園

今の場所に引っ越して来たのは、ちょうど七年前でした。そして、初めてつきあったのは、キジでした。家の窓まで近付いて来るキジを見ては素敵な所に引っ越して来たものだと、毎朝が楽しみでした。近所に以前から住んでいた方のお話だと、珍しいことではなく、ごく当たり前のことのようでした。

こうして、キジに会いたくなると、近くの南公園に出かけるようになりました。散歩に連れてきた子犬の足音に驚いたキジの雌が飛び立ち、少したって、雄の一声が聞こえました。

小さな庭にも野鳥の姿

私の家は福木亭のすぐ近くです。国道一四八号線交差点わきの小さな庭にもたくさんの野鳥が姿を見せてくれます。冬中ずっと来ていたメジロも三月の後半になると、ピタッと来なくなり、スズメに交代します。これは毎年くり返されていることです。スズメが三月にならないと餌を食べに来ないのは、子育てのためでしょう。冬の間は、屋根や電線で遊んでいるだけのようです。ヒヨドリが一番長い間にわたって来ます。

ウグイスが来たのに気づいたのは、たったの一日だけでした。ジョウビタキは、去年来たけれど、今年はとうとう姿を見られませんでした。家の庭の柿の実がなくなると、みかんを枝にさしておきます。パンクズは手作りの餌台に置いてやりますが、時々、猫が横取りを楽しんでいるのも見かけます。この猫が捕らえて来たものに、ミソサザイ、キジバト、ツグミ、ヒヨドリなどがあります。おそらく、夜の間に捕えたのではないでしょうか。家の中に迷い込んで来たものには、ウグイスやツバメ、それから、スズメがいました。

南公園は野鳥の宝庫

今から数年前は、車の交通量も少なく、この辺りはとても静かでした。そんなある夕方でした。思い出します。「カーウ、カーウ」という鳴き声がして、南公園の方を見ると、大きな鳥がうずのような輪を描きながら群れをつくって飛んできました。あっけにとられて見ていると、頭の上まで来て、羽音も高く東北の方に飛び去って行きました。十五羽よりも多かったと記憶しています。あっという間のできごとだったので確信はありませんが、以前に南公園の池にいたコブ白鳥だったのではないかと思います。初めての体験で、すっかり興奮してしまい、それから毎夕池に出かけましたが、以後一度も見ることができません。

また、夏の夜、流星群が見られた頃のことでした。今は、日産自動車になっている空き地に出かけたりしました。毛布と蚊取り線香を持参し子犬もお供に連れての夜中の野鳥ウオッチングとしゃれこんだりしました。徹夜になったりもしました。白サギが、夜中でも鳴きながら、必ず一羽ずつ飛んでいくのです。初めのうちは、これをガンの鳴き声だと思ったりして、季節外れなのにおかしいなどと勘違いをしていました。「カギになりサオになり」という本物の姿にお目にかかることも一度だけありました。

このほか、今は、アヒル、マガモ、カルガモ、カイツブリ、カワウなどが見られますし、夏になれば、アジサシやヨシゴイもいます。あの、誰もが、その美しさに胸をはずませるかわせみは年中見られます。

私が、今までの間に南公園で見かけた鳥を思い出せるだけ上げてみます。

メジロ　ウグイス、ホオジロ　シジュウカラ　エナガ　キジバト　ツグミ　トラツグミ
ビンズイ　ムクドリ　カケス　セグロセキレイ　カラス　トビ　ケリ　タゲリ　モズ
ヒヨドリ　シラサギ　キジ　カルガモ　マガモ　カワウ　アヒル　カイツブリ　スズメ

まだまだ、私には名前の分からない鳥の方が多いのです。

「あんたはだれですか？」と、追っかけてみなければならない場面ばかりです。

コゲラなどは、木の穴を打つ音だけしか耳にすることができません。どこかに、きっといるのです。私にとっては「幻の鳥」なのです。ホトトギスも、南公園では、声だけしか聞いていない「幻の鳥」です。その声があまりに美しくて、家に走って帰り、テープレコーダーを持ち込んだりしましたが、すでに、姿もなくがっかり肩を落としたことが忘れられません。

もう六十三才になってしまいましたが、わが家の犬と一緒に散歩しながらの野鳥観察は私のやめられない楽しみの一つです。これからの私の夢は上地小学校の野鳥好きな子たちと一緒に奥山田池や大谷池、天狗山や大谷の山を歩いてみることです。心の優しい、上地っ子の皆さん。その節は、どうぞよろしくお願いします。ぜひ、仲間に入れて下さいね。

若松東二丁目一の五番地　斎藤かをる

斎藤かをるさんのご紹介

「斎藤先生」とお呼びした方が、私には実感がこもります。というのは、先生は岡崎市内で二十六年間にわたって教職を経験された大先輩だからです。市内女教師の指導に当たられた時期もありました。お隣の福岡小学校に八年間も勤務されていたこともあります。いつも、にこやかな笑みをたたえておられることは、今も昔も変わりません。先生のおっしゃるように、上地っ子の皆さんと一緒に、野鳥観察に出かけられる日がきっとくると私も期待しています。

上地小学校教頭　柴田　誠

三、上地の水はおいしいぞ

～上地配水場を訪ねて～

「ああ、おいしいー」

今日もサンクガーデン西の冷水機に、子どもたちの列ができています。額から流れる汗をふこうともせず、元気いっぱいの上地っ子が喉を鳴らして言いました。間もなく、プールでも、子どもたちの歓声が学校をにぎやかにさせてくれることでしょう。

「ところで、上地のおいしい水はどこから来た水？」

今回は、こうした疑問に迫る「ふるさとシリーズ」に挑戦してみようと思います。

一、標高五十一メートル「大谷の山」に立つ

私たちの上地学区を東西に走る県道「衣浦岡崎線」沿いに医療刑務所があります。この刑務所前から東に向かって、市内の藤川方面に抜けていく旧「吉良道」（きらみち）があります。

五月の連休を過ぎたある日、「吉良道」に足を運んでみました。冬の間から、ついこの四月までは、百羽を越すカルガモの大群がいた大谷池には、すでに野鳥の姿はなく、すっかり静まりかえっています。池のほとりには「岡崎上地第二特定区画整理組合現場事務所」が目にとまります。ここから、更に東へ向かって行くと、生い茂った木々の間から、コンクリートの建物が姿を現わしました。金網のフェンスに囲まれたドーム状の「上地配水場」が見えてきました。配水場を背にして、眼下を見下ろしてみました。学校を初め、上地・若松の学区が一望でき、さすが、標高五十メートルを越す山との実感が迫ってきました。足の下に、確かな水の流れを感じます。

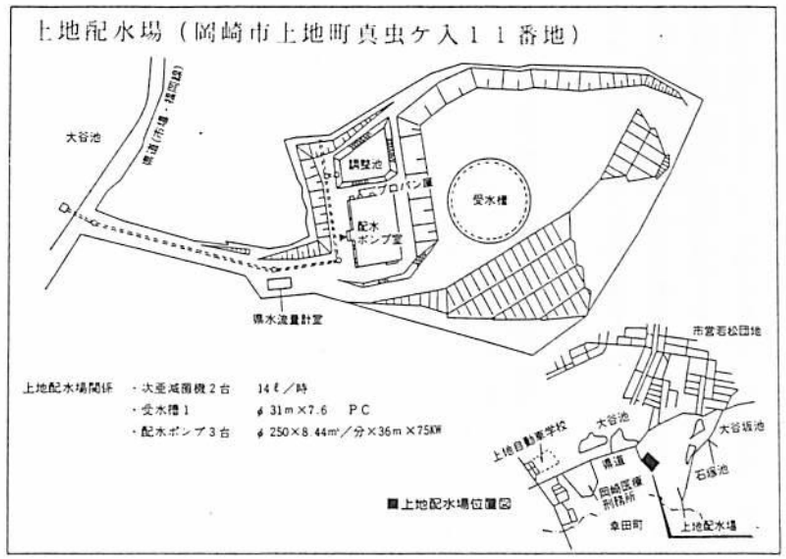
二、「上地配水場」建設の歩み

雑木が茂り、やせた山肌をのぞかせる上地町真虫ケ入の山々に配水場建設の音が響くようになったのは、昭和五十七年でした。総工費約十二億円を予定して、岡崎市水道第四期拡張事業の一環として「上地配水場」の新設が決定されてからのことです。岡崎市の給水人口増を見込み、主として市内南部地域への配水を急がなければならない状況から、すでに、昭和五十六年に、上地町に建設用地の選定がされていました。

こうして、昭和五十七年には本格的な工事に入り、用地造成と並行しながら急ピッチに進行していくことになりました。この年度内に、受水漕・送水ポンプ室の完成をみました。

続いて、五十八年には、電気・機械工事に着工し、七月十五日からは早くも一部通水を開始する運びとなりました。この年度末には、一日に一万五千立方メートル、約六千戸二万四千三百人分の配水体制を整えることとなりました。これらに要した費用総額は、五億八千八百万円という巨費に上りました。

上地が、岡崎市南部地区の「配水場」として選ばれた背景には、上流にダムがない男川を主水源としている岡崎市の水道事情によるものと思われます。こうして、矢作川を水源とする隣接の幸田浄水場から受水し、市内の南部地域に自然流水させる適地として上地が浮かび上がったのでした。



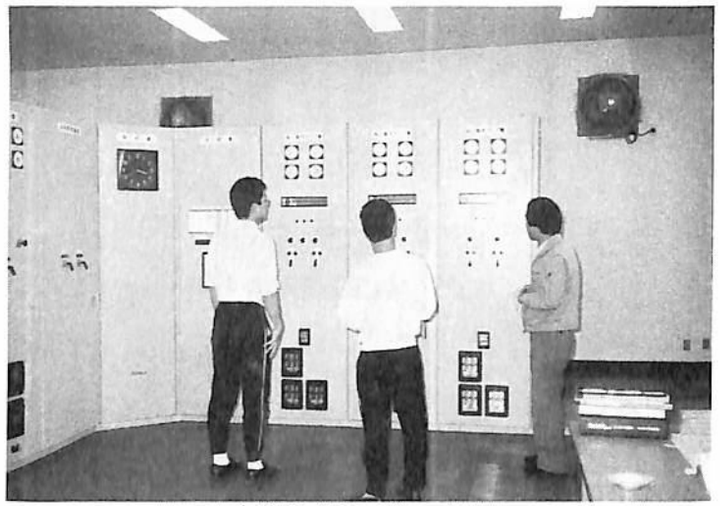
三、一日に平均九千立方メートルを配水
〜「上地配水場」見聞記〜

五月十三日（金）の授業後、松原・青木両先生と一緒に、上地配水場に出かけました。男川上水場の管理下にあるため、事前に係の吉田さんと連絡をしてあったので、すでに、氏は門前のフェンスを開いて待っていて下さいました。本校開校以来、職員としては、私たちが最初の入場を果たしたことになります。挨拶を済ませ、早速、吉田さんのご案内で場内を見学することになりました。

先ず初めは、電気室です。広い部屋には机と椅子が各一脚ずつ置かれているだけです。配水場の頭脳とも言える配水制御機器が忙しく作動を続けています。完全無人化だけに、そのコントロールは男川上水場・幸田浄水場の機器とこの上地配水場の装置が相互に連動し合うようにされています。配水量が、刻々と計器類にデジタル標示されていきます。

配水ポンプ室には、三台の大型ポンプが設置されていて、この日は二台が作動中でした。一日の内で、ポンプがフルに稼動する時間帯は朝の七時から八時まで夜の七時から十一時までとの説明がありました。説明を裏付けるように機器から打ち出されてくる記録用紙が、この日の配水量をはっきりと証明しています。

年間を通しての一日当たりの平均配水量は、九千立方メートルですが、夏期には、二万立方メートルを越すような場合もあります。（昨年八月に記録）



上地配水場のポンプ室

ポンプのある地下室は、ゴー、ゴーと絶え間のない回転音を発し続けています。三台のポンプからは口径二百五十ミリメートルの配水管が出て、それが一つにまとまって八百ミリメートルの本管に流れ込んでいます。ここが、標高五十一メートル、「上地の水」の源流なのです。岡崎市内全配水量の約一割を占める大量送水の「基地」でもあります。

外に出ると、円筒形の直径三十一メートル、高さ七、六メートルの受水槽が一基、大谷の山を背にしてどっかりと座っています。眼下の大谷池を初め上地学区を一望でき、「配水場」として絶好の適地と見えました。

近く、四年生の子どもたちが、社会科「浄水場のしくみとはたらき」の学習のため、この地を訪れ、「上地の水」に驚きの声を上げることでしょう。

上地小学校　田中　鉄也

63　年　3　月分

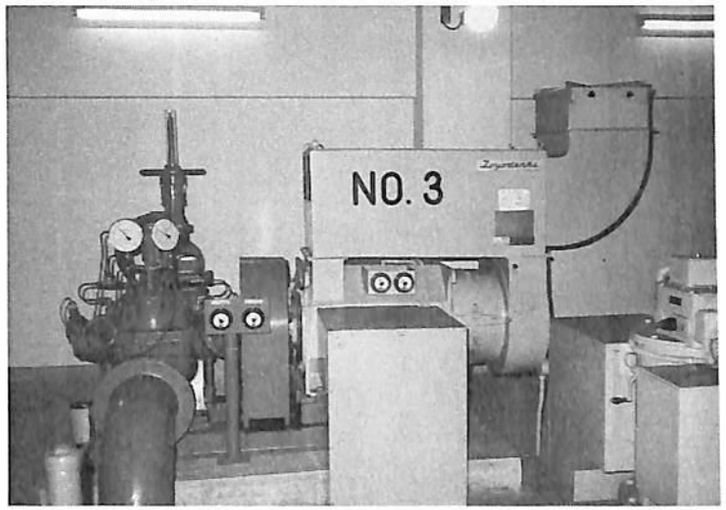
給水量測定表

オカザキ-2

承認基本給水量　　m³

承認基本給水量×11/10　　m³

日付	流量カウンタ	日給水量
20	919320	(×1m³)
21	926134	6814
22	932119	5985
23	938425	6306
24	946206	7781
25	953389	7183
26	959633	6244
27	966179	6546
28	974617	8438
29	981046	6429



配水場内の自動制御装置前

四、上地の雑草探訪（その一）

～学校周辺を歩いて～（その1）

一、身近な緑―雑草―

上地学区の大半は、昭和五十一年から本格化した区画整理事業で宅地造成で誕生しました。しかし、田や畑、山や池も多く残され、区画整理後とは思えないような変化に富んだ土地利用の様相を示しています。

本来、植物はそれぞれの土地に適応して分布すると考えられます。この上地学区には、多様な植物の分布が見られるのではないかと思い先ず、身近な植物である雑草について調査することにしました。

二、調査の方法

上地小学校には「雑草博士」と愛称されている六年生の壁谷祥和君がいます。彼の協力を得て、七月二日（土）四日（月）七日（木）の三日間実地調査をしました。

1　調査した場所

①校地の東・西・南・北の四つの斜面
②職員駐車場の西端
③水辺の湿地
④宅地造成後の空き地
⑤平地と山の境（スソ）
⑥田のあぜみち
⑦道端

2　調査の仕方

一辺が一・五メートルの正方形の範囲をひもで区切り、その中に、どのような種類の雑草がどれだけの群落を形成しているかを調査しました。

二、雑草の分布状態

1　校地の東斜面

上地市民ホームの西側の土手、「力いっぱい」の大看板が取りつけられている所です。昼過ぎからの日照をよく受けています。そのためかどちらかと言えば、やや乾いた土地に繁殖する雑草が見られるようです。

	雑草名	群落数
1	スズメノカタビラ	5
2	ヌスビトハギ	4
3	セイタカアワダチソウ	3
4	ヨモギ	2
5	アレチノギク	2
6	チチコグサモドキ	2
7	ヤハズソウ	2
8	シロツメグサ	1
9	モジズリ	1

「ヌスビトハギ」は、全国どこにでも見られる高さ六十～百二十センチメートルのマメ科の多年草です。夏から秋にかけて、花が咲き、できた果実を「盗人」の足あとにみたてて和名を「盗人萩」と呼びます。

また、一説には、果実が「盗人」のように、そっと、人のあとをつける意味だとも言います。

2　校地の西斜面

校地全体がやや東にふれているため、西側とはいえ、午後からの日照時間も大変長く雑草たちの繁殖には適地のようです。校地の四つの斜面の中では、最も多くの種類の雑草が見られました。

この十五種の中で、注目したいのは「チチコグサ」です。私たちが道端などで、よく見かけるのは「チチコグサモドキ」で、まさに、「チチコグサ」の「モドキ」です。

ヌスビトハギ　*Desmodium racemosum* (Thunb.)

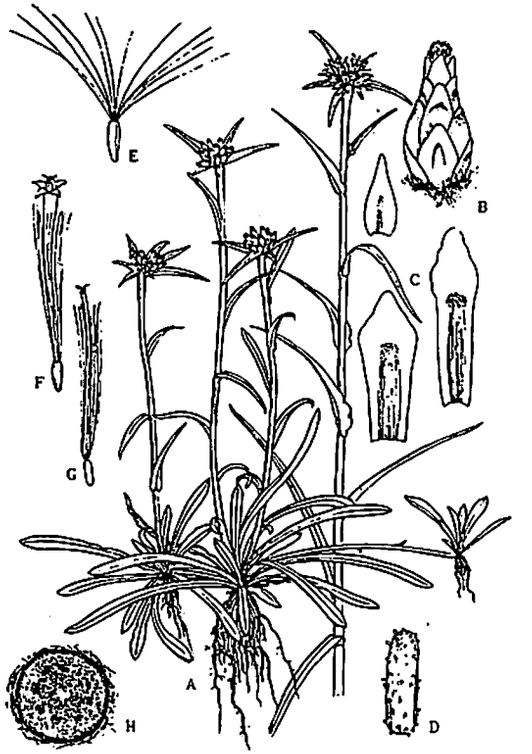
	雑草名	群落数
1	ジシバリ	4
2	スズメノカタビラ	4
3	アレチノギク	4
4	シロツメグサ	3
5	ヤハズソウ	3
6	カタバミ	3
7	ハハコグサ	3
8	セイタカアワダチソウ	3
9	メドハギ	2

	雑草名	群落数
10	コニシキソウ	2
11	チチコグサ	1
12	ツメグサ	1
13	セイヨウタンポポ	1
14	モジズリ	1
15	チチコグサモドキ	1

「チチコグサモドキ」は熱帯アメリカ原産の帰化植物で、花の色は「チチコグサ」と同じ灰褐色ですが、外観はむしろ、「ハハコグサ」の方に近いと言えます。

私たちが調査した校地の四つの斜面のうち「チチコグサ」が繁殖しているのは、このほかに、西斜面に数カ所数えたのみで、他はすべて「チチコグサモドキ」でした。これは、帰化植物特有の強い生命力で、在来種の「チチコグサ」を非常に速いスピードで駆逐していること

キク科(キク亜科)



チチコグサ *Gnaphalium japonicum* THUNB.

を示しているのではと思われます。

3 校地の南斜面

この斜面の下は通学路になっていて、片隅には、アベリアが白い花をつけています。石垣のすぐ上の所は、さっきがびっしりと植え込まれているため、南側ですが、あまり日当たりがよいとは言えません。

多くの種類の雑草の分布を予想していましたが、四つの斜面の中で最も少なく、わずか五種類しか見られませんでした。その理由として考えられることは、

① さっきの繁殖によって、日照がさえぎられていること。

② 南側とはいえ、校地全体が東にふれているため、午後になると、早くから日かげになってしまうこと。

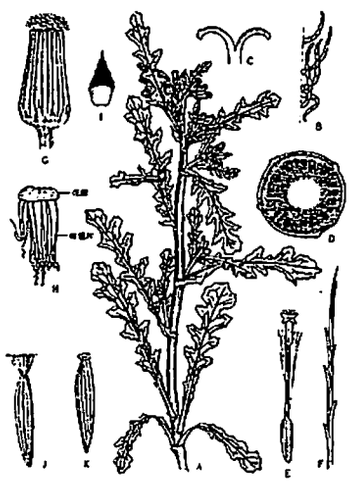
などが考えられます。

	雑草名	群落数
1	アレチノグサ	3
2	スズメノカタビラ	3
3	セイタカアワダチソウ	1
4	チチコグサモドキ	1
5	不明	1

4 校地の北斜面

さっきの植え込みもあり、校地の周囲の中では、雑草にとって、最も繁殖に適さない場所と考えられます。予想に反して、東斜面と同じ

キク科(キク亜科)

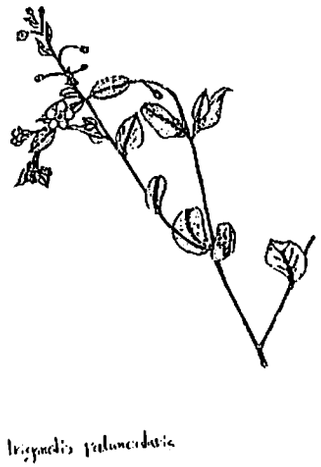


ノボロギク *Senecio vulgaris* L.

九種類の雑草が繁殖していました。ここで注目したいのは「ノボロギク」です。

	雑草名	群落数
1	スズメノカタビラ	5
2	アレチノギク	3
3	セイタカアワダチソウ	3
4	カタバミ	2
5	ジシバリ	2

	雑草名	群落数
6	ノボロギク	1
7	タチノヌノフグリ	1
8	セイヨウタンポポ	1
9	エノコログサ	1



「ノボロギク」は高さ十～四十センチメートルの小～中形の一年草、または二年草です。全国どこでもふつうに見られるキク科の植物で有毒です。

昭和の初め、ヨーロッパから帰化し、特に都市周辺の荒れ地や農地に見られます。学校の周辺には、食用になる雑草も多く見られますが、このような有毒植物も時々見受けられます。

5　職員駐車場の西側

ここには、最も多くの種類の雑草が見られました。このように、多くの雑草が「縄張り的な」植生を示しているのは、それぞれの雑草に適応する様々な条件が狭い範囲にあることを意味していると考えられます。

「キュウリグサ」は、高さが十～三十センチメートルの小型の二年草で、林のへり・畑・道端などで見られます。葉をもむと、キュウリの

においがすることから名付けられ、しぼり汁を料理の薬味として用いることもあるそうです。淡い青紫色の可憐な花をつけます。

	雑草名	群落数
1	カタバミ	6
2	ハハコグサ	4
3	スギナ	4
4	アキノノゲシ	3
5	チチコグサモドキ	3
6	セイヨウタンポポ	3

	雑草名	群落数
7	ムラサキカタバミ	2
8	ムヒシバ	2
9	ツメクサ	2
10	イタドリ	1
11	オニノゲシ	1
12	ミミナグサ	1

	雑草名	群落数
13	キュウリグサ	1
14	トキワハゼ	1
15	ハコベ	1
16	ボントクダテ	1
17	セイタカアワダチソウ	1

「トキワハゼ」は高さ五～十五センチメートルの小型の多年草です。畑・庭・道端などで見られます。花も葉の形もそっくりなものに「ムラサキゴケ」がありますが、「ムラサキゴケ」はランナー（走出枝）を出し花期は春で湿地（特にあぜみち）などに多く繁殖しています。両方とも可憐な花をつけます。次号では、学区に足を伸ばしてみたいと思います。

上地小学校　青木　純

五、上地の雑草探訪（その二）

～学校周辺を歩いて（その2）

七月号の見出し　1　校地の東斜面　2　校地の西斜面
3　校地の南斜面　4　校地の北斜面
5　職員駐車場の西側

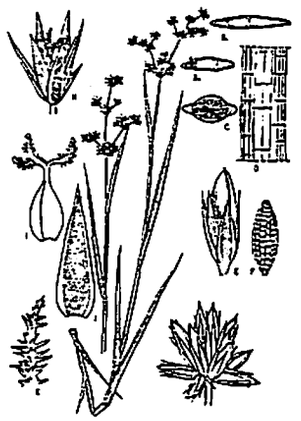
6　水辺の湿地

今年の夏、開設された大谷公園キャンプ場下の池の水辺を調べてみました。食虫植物の「モウセンゴケ」が発見できるのではないかと期待していましたが、この場所以外の所でも全く確認できませんでした。かつては、湿地の至るところで見られたのですが、一体どこにいってしまったのでしょうか。

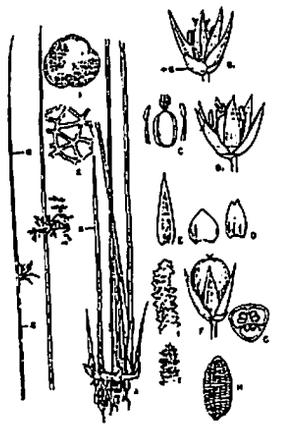
全体としては、湿地特有の「コウガイセキショウ」や「イグサ」、湿った草地などに繁茂する「チドメグサ」や「ボントクタデ」、水が枯れた池などに生える「オナモミ」など湿地らしい植生を示しているようです。

	雑草名	群落数
1	コウガイゼキショウ	5
2	イグサ	4
3	アメリカセンダングサ	3
4	オナモミ	3
5	チドメグサ	3
6	ボントクタデ	3

	雑草名	群落数
7	メヒシバ	3
8	カワラケツメイ	2
9	不明	2
10	ヤハズソウ	1
11	シロツメグサ	1



コウガイゼキショウ　*Juncus tenuis* Willd.



イ（トウツノウ）　*Juncus effusus* L. var. *decipiens* Buchen.

7　空き地

学校の南門を出るとすぐの所にある空き地は、朝から夕方まで日がよく当たる場所です。種類はあまり多くありませんが、典型的な乾いた荒れ地・原っぱの植生を示しています。

宅地造成が行なわれたままで家が建てられていない状態が続いているわけです。学区内の他の空き地も、おおよそ、このような植生であろうと推測されます。

	雑草名	群落数
1	モジズリ	7
2	ヤハズソウ	6
3	チチコグサモドキ	4
4	スズメノカタビラ	4
5	メドハギ	3

	雑草名	群落数
6	アレチノギク	3
7	セイタカアワダチソウ	2
8	シロツメグサ	2
9	オオマツヨイグサ	1
10	ヨモギ	1

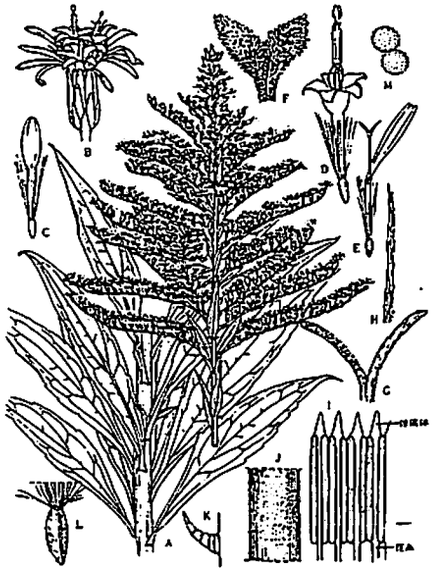
ネジバナ（モジズリ）　*Spiranthes sinensis* (Pers.) Ames subsp. *australis* (R. Br.) Kitam.

「モジズリ」は高さが十～四十センチメートルの小型のラン科の植物で、花の穂がねじれているため「ネジバナ」とも呼ばれています。小さいながらも、淡紅色のラン科特有の美しい形をした花で、時々園芸店などで売られていることもあります。

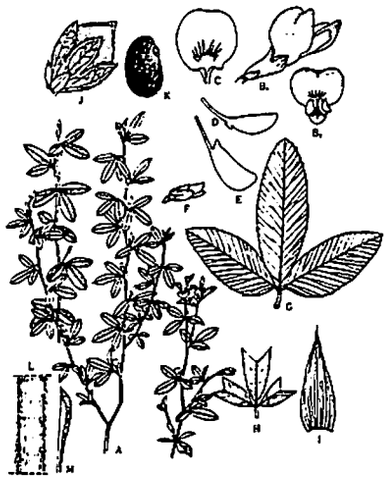
多くのラン科の植物は、林の中でひっそりと可憐な花を咲かせていますが、「モジズリ」は人家に近い所で普通に見られる変り者ものです。

「セイタカアワダチソウ」は北アメリカ原産の大型キク科の帰化植物です。秋になると、空き地や荒れ地・河原などで最も目につく黄色の花をつけた草です。

この花粉が、ぜんそくのアレルギーを起こす原因と考えられて嫌われていますが（最近では、あまりそのように強調されなくなりましたが）ミツバチの蜜源となる美しい花です。



セイタカアワダチソウ　*Solidago altissima* L.



ヤハズソウ　*Kummerowia striata* (Thunb.) Schindler

8 山すその植物

上地学区には、大谷公園から医療刑務所・配水場にかけて山林が多く残っています。そのうちで、配水場東の山林と田の間の西側のスソ群落を調査してみました。

	雑草名	群落数
1	ヨモギ	4
2	ヘクソカズラ	4
3	ヒメジョオン	3
4	ヤマカモジクサ	3

	雑草名	群落数
5	ササ	2
6	カナムグラ	1
7	セイタカアワダチソウ	1
8	ヌスビトハギ	1

ヘクソカズラ *Paederia scandens* (Lour.) Merr. var. *mauritiana* (Lam.) Hara

西側のすそでしたが、「ヨモギ」「カナムグラ」「ヘクソカズラ」「ヤマカモジグサ」などの日かげのスソ群落を形成する雑草を発見でました。

図で示した「ヘクソカズラ」はアカネ科のつる性の多年草で名前の通り葉や茎にいやな匂いがあります。雑木林のへりの低木や垣根にからみついているのを見られた方もあると思います。

9 田のあぜ道

国道二四八号線の西側に残る田のあぜ道を調べてみました。

	雑草名	群落数
1	チガヤ	6
2	スギナ	5
3	ジシバリ	5
4	ヨモギ	4
5	カタバミ	3

	雑草名	群落数
6	セイタカアワダチソウ	3
7	アレチノギク	2
8	エノコログサ	2
9	キツネノボタン	1

	雑草名	群落数
10	チドメグサ	1
11	コナスビ	1
12	アキノノゲシ	1
13	コモチマンネングサ	1

あぜ道によく見られる雑草としては、「キツネノボタン」「チドメグサ」「コモチマンネングサ」ぐらいのもので、乾いた空き地などでも見られる雑草が意外に多く確認されました。

これは、日がよく当たる乾田だとか、車道が近くを通っているといったことが原因ではないかと思われます。そのため、あまりあぜ道らしい植生を示した場所とは言えないようです。

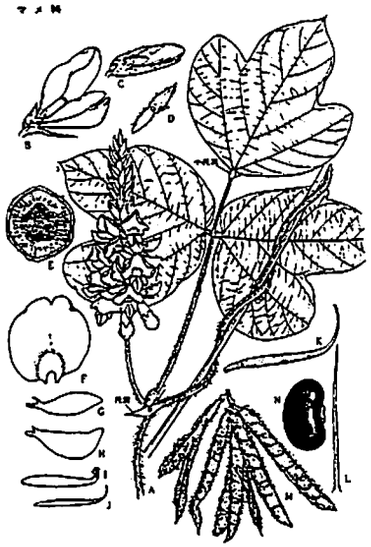
「キツネノボタン」はキンポウゲ科の十五〜八十センチメートルの中型の多年草で有毒です。この果実の集まり（集合果……キイチゴやクワの実などもそうです）は、金平糖（こんぺいとう）に似ているので子どもたちは「コンペイトウ」と呼んでいます。

10 道端の植物

奥山田池東の歩道に生えている雑草を調べてみました。歩道のほとんどでは、コンクリートやアスファルトでおおわれ、雑草の侵入する余地はありません。調査した場所も「クスノキ」や「サツキ」を植えるために残された僅かな「土」です。

ヨモギ	4	イヌムギ	3	スギナ	3	セイヨウタンポポ	3	クズ	2
カモジクサ	2	カタバミ	2	ジシバリ	2	アキノノゲシ	1	シロツメグサ	1
アレチノギク	1	コニシキソウ	1	ガガイモ	1				

キツネノボタン *Ranunculus quelpaertensis* (Lévellé) Nakai



クズ *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi

「クズ」は林のへりや土手など、どこにも多い大型マメ科のつる性多年草です。茎は十メートル以上にも伸び、他の木や物にからまります。根からは、良質のデンプンがとれ、これが「くず粉」です。秋の七草の一つとしてよく知られてもいます。

四、雑草調べを終えて

全部で学校周辺、十か所の地点を抽出して調査してみましたが、この限られた狭い範囲でも五十一種類の雑草が繁殖していることが分かりました。

調査のため、歩いている間も、抽出地点にはありませんでしたが、山すそには「オカトラノオ」、湿地の近くには「ザクロソウ」、空き地には「イヌホウズキ」、あぜ道には「ミゾカクシ」などが見られました。おそらく、上地学区全体をくまなく調査すれば、今回の倍以上百種類を越える雑草を発見することになるはずです。

また、機会があったら、同好の皆さんと一緒に、林のマント群落、林内のスソ群落、池などの沈水・浮葉植物群落にまで範囲を広げてみたいと思っています。

図示した雑草のうち、「キュウリグサ」「トキワハゼ」を除いて、他はすべて「原色野草観察検索図鑑」によりました。

上地小学校　青木　純

上地小学校周辺十か所の雑草調べ一覧

	雑草名	校地東	校地西	校地南	校地北	駐車場	湿地	空き地	山すそ	あぜ道	道端	帰化植物
一	アレチノギク	○	○	○	○						○	○
二	セイタカアワダチソウ	○	○	○	○	○		○	○			○
三	スズメノカタビラ	○	○	○	○							
四	チチコグサモドキ	○	○	○		○		○				○
五	チチコグサ		○									
六	シロツメグサ	○	○				○	○			○	○
七	メドハギ		○					○				
八	ヤハズソウ	○	○				○	○				
九	ジシバリ		○		○				○		○	
十	カタバミ		○		○	○			○		○	
十一	ハハコグサ		○			○						
十二	ツメクサ		○			○						
十三	セイヨウタンポポ		○		○	○					○	○
十四	モジズリ	○	○					○				
十五	コニシキソウ		○								○	○
十六	ヨモギ	○						○	○		○	
十七	ヌスビトハギ	○										
十八	ノボロギク				○							○
十九	タチイヌノフグリ				○							○
二十	エノコログサ				○							

	雑草名	校地東	校地西	校地南	校地北	駐車場	湿地	空き地	山すそ	あぜ道	道端	帰化植物
二十一	アキノノゲシ					○				○	○	
二十二	イタドリ					○						
二十三	オニノゲシ					○						○
二十四	ボントクカデ					○	○					
二十五	ミミナグサ					○						
二十六	スギナ					○				○	○	
二十七	ムラサキカタバミ					○						○
二十八	キュウリグサ					○						
二十九	メヒシバ					○	○					
三十	トキワハゼ					○						
三十一	ハコベ					○						
三十二	アメリカセンダングサ						○					○
三十三	オナモミ						○					
三十四	コウガイゼキショウ						○					
三十五	イグサ						○					
三十六	チドメグサ						○			○		
三十七	カワラケツメイ						○					
三十八	オオマツヨイグサ							○				○
三十九	ヒメジョオン								○			○
四十	ササ								○			

	雑草名	校地東	校地西	校地南	校地北	駐車場	湿地	空き地	山すそ	あぜ道	道端	帰化植物
四十一	カナムグラ								○			
四十二	ヘクソカズラ								○			
四十三	ヤマカモジグサ								○			
四十四	キツネノボタン									○		
四十五	コナスビ									○		
四十六	チガヤ									○		
四十七	コモチマンネングサ									○		
四十八	イヌムギ										○	○
四十九	クズ										○	
五十	カモジグサ										○	
五十一	ガガイモ										○	

オカトラノオ *Lysimachia clethroides* Duby

六、岡崎医療刑務所を訪ねて

一、三十年前に工事が始まる

「岡崎市上地町字小田ケ入一」

これは、大谷池南西の山続きにある「岡崎医療刑務所」の住所です。標高四十メートルの大谷の山に連なる二つの山を削ってできたのが、「岡崎医療刑務所」です。

昭和三十年代初期の上地には、現在の自動車学校も勤労福祉会館も、そして、国道二四八号線もありませんでした。山、畑、森、林、田が大半を占める開発前の上地は、まさに、岡崎市南方の山間僻地だったと言えるでしょう。

「工事といえるようなものは、現在の大谷池南側の『吉良道』拡幅のために行なわれた『失業対策事業』による道路工事ぐらいだったと思う。」

これは、去る四月二十六日（火）の朝、上地第一特定区画整理組合事務所を訪ねた折に、副理事長の畔柳市太郎氏が言われたことです。昭和二十五年から七年頃にかけて吉良道の道幅を広げたり、カーブの直線化等の改修工事だったようです。藤川町の市場と福岡町を直接結んでいたので「市場線」とも呼んでいました。

さて、この日、事務所にお集まり下さったのは、理事長の畔柳八百吉さん、同副理事長の畔柳市太郎さん、理事の稲石正美さんの三人でした。岡崎医療刑務所の沿革によれば、建設にかかわる歴史が次のように記されています。

昭和三十二年　法務省経甲（営）第一九四七号により、移転候補地を岡崎市上地町字小田ケ入一と決定した。
昭和三十三年　移転のため現在地の整地工事を開始した。
昭和三十七年　工事完了し、法務省令第六三号官制改正により、名古屋刑務所岡崎医療刑務支所と改称、名古屋、大阪両管区内各刑務所の精神障害者を集禁、医療行刑を再開した。
昭和四十六年　政令第二十八号により、岡崎医療刑務所が設置された。

二、康生町の刑務所が上地に移転する

岡崎市に刑務所が設置されたのは、明治十四年です。現在の康生町に既決囚の収容を目的として、「愛知県監獄岡崎支署」として発足しました。以来、「名古屋監獄岡崎分監」「名古屋刑務所岡崎刑務支所」「岡崎少年刑務所」「名古屋刑務所岡崎刑務支所」「名古屋刑務所岡崎拘置支所」「名古屋刑務所岡崎刑務支所」、精神薄弱受刑者の収容施設に指定されて、「名古屋刑務所岡崎医療刑務支所」と、その名称や収容目的の変遷が見られました。

昭和二十二年から同三十四年までの三期十二年間にわたって市長を勤めた竹内京治氏らの働きかけで、当時、市の中心部にあった刑務所の移転問題が浮上していました。岡崎市の将来展望に立ち、「都市再開発」の中心地に刑務所はふさわしくないという考えでした。

本町康生西地区には、刑務所・拘置所・検察庁・裁判所等の施設、税務署・警察署がまとまってあり、ここは一つの官庁地区であった。これは商店街の拡大に障害と考えられていたが、昭和三十三年頃から、これらの施設は順次郊外へ移転した。跡地は市の小売商業活動の核心とすることとなり、このために中高層ビルによって土地利用の高度化を図り、市内の主要商店の出店に加えて大型店をキーテナントとして組み込む方策がとられた。（岡崎市史史料編　現代　十一　より）

こうした動向の一つとして、刑務所の移転先候補地として上地が脚光を浴びることになりました。移転候補地に山林を持ってみえた畔柳八百吉理事長さんや副理事長さんにお話をお聞きしました。

「吉良道（市場線）が拡幅されて、大谷池南側を通って福岡町へ抜けていく今の刑務所の辺りの山地は、特別な利用価値もない所でした。岡崎市の中心地の開発のため、刑務所の替え地探しが始まり、この上地が候補地になってきました。当時は竹内市長で、その意向を受けて鈴木助役が何度も現地にやって来られました。私も山の上の方と池のほとりに土地を持っていた関係で、説明を聞いていました。この移転計画には、むしろ旗を立てて反対するというようなことは一切ありませんでした。道沿いの土地が、一反当たり十万円で山の上の方が四万円平均して六万円だったと記憶しています。」

一体の山は、雑木がほとんどのために山林としての価値はあまりなく、地元の了解が比較的順調に推移したようです。しかし、三十年前とは言え大谷池周辺の地価が一坪当たりに換算すれば、二百円。まさに、隔世の感がします。こうして、昭和三十三年。いよいよ、大谷の山を削る、大規模な刑務所建設工事が始まりました。

三、スクレーパーが主役の建設工事

三十年前の工事としては、大きな重機械が導入され、土砂のすくい込みや運搬専門のスクレーパーが主役でした。削った土砂は、山の低い方に移していたため、他へ運び出すということはほとんどなく、すべて工事区域内で使われました。整地が済んで、建築が始まると、康生町の刑務所に収容されている受刑者も建設作業に参加していましたが、時折、現場を見かけていた畔柳市太郎さんによれば、「あまり能率は上がらなかったようでした。」とのことでした。

しかし、スクレーパーの威力は大したもので、十トン積みダンプ一台分の土砂を一気に運び出していきました。建築業者が本格的に作業に乗り出すと工事は急速に進展を見せ、延々と五カ年間にわたって続いた工事も昭和三十七年には完成しました。

当時を回想しながら、第一区画整理事務所に集まった三人の上地地区開拓の先駆者たちは、話を続けて下さいました。

「刑務所ができると、面会に来る人があるので、上地は飲食店が繁盛するはずだと言われていたけれど、そんなふうにはいかなかったようです。」

「しかし、初代の大谷正敏刑務所長さんが言われたことが忘れられません。」

「そうだったね。『今から十年後の上地を見てください。必ず、発展する。』と、こう言われました。」

「あの方は、刑務所ができてから発展した仙台での体験を話されましたね。」

「上地も、やっぱり、刑務所が大きな発展の契機になったような気がします。」

ほとんどが山ばかりだった、過ぎ去った「むかしの上地」を思い出しながら、更に、話がはずみます。

「刑務所建設」が、上地地区「発展の大きな契機になった」という言葉がずっしりと重く響きます。

四、「治療と教育」が主体の刑務所

八月の上旬、むし暑い夏休みの午後でした。医療刑務所の房宗秀夫所長さんをお訪ねしました。忙しい日程をさいて一時間余にわたって話をお聞きすることができました。

昭和五十年から、岡崎医療刑務所二代目の所長を勤められ、来年三月、定年による退官予定とのことです。とても、六十五才とは見えず、元気はつらつとしていらっしゃいます。

「この刑務所は、受刑者のうち知能の発育が著しく弱い精神薄弱者を含め精神に異常をきたした者を収容しています。そして、刑の執行という厳正な環境の中で専門的な医療処遇をする医療矯正施設です。こうして、それぞれの受刑者に最も適切な治療や教育をして、よりしっかりとした社会復帰ができるようにすることを目的にしています。刑務所とはいえ、制約された環境の中でも精神障害者に必要な治療的な雰囲気を高めていくように気をつかっています。」

所長さんは、特に受刑者の「治療」と「教育的処遇」ということを強調されました。

「こうした目的を達成していくためには、今の施設設備を全面改築するぐらいの大胆な計画が必要」なことを幾たびか法務省に意見具申していることも語られました。七九、九八八平方メートルという、上地小学校の三倍余の広大な敷地をもつ刑務所への確固とした将来展望が浮かび上がってきます。昭和三十七

受刑者の手で作られた「上地焼き」

年に「岡崎医療刑務支所」として発足しただけに、様々な不都合や制約があり、目的達成も思うにまかせない面もあると思われます。

五、「刑務所を見れば、国がわかる」

不十分な施設の中で受刑者への温かい「医療」と「教育」が日夜、百七人の職員によって行なわれていることが察せられます。こうして所内での毎日のくらしをお聞きしている中で、所長さんは何気なくこんなふうに話されました。

「昔から監獄を見れば、その国が分かると言われてきました。チャップリンが日本へやって来た時、東京の駅頭で語った言葉は『日本の監獄を見せてくれ』ということだったと聞いています。それは、監獄を見れば、国民の生活程度が分かるという考えからのようです。確かにそうです。現在、我が国の刑務所、なかでも新しく作られた刑務所などは非常によくなっていますね。驚くばかりです。施設も処遇も目を見張るばかりです。一般社会で汗水流して一生懸命働いている人よりも、刑務所の方がいい生活をしているというのではありませんが、それよりわずかに低い衣食住の生活ということです。そういう意味からすれば、確かに、刑務所を見れば国が分かると言えるでしょうね。」

昔から、監獄でくらしたことを「くさいめしを食った」と言います。そこで、刑務所内の食生活についてお聞きしました。

「それは、いい問題です。昔は、刑務所の主食は麦が六で米が四の割合でした。ですから、はっきり言って、『麦くさいめし』だったのでしょう。それが、今では、この比率が全く逆転して麦が三で米が七になってしまいました。副食も栄養士がいて、献立等良く管理され、まさに、『健康食』を給与しています。この刑務所では、今年度は一日の副食費が二百九十一円と決められていますが、自衛隊より少し落ちる程度ではないでしょうか。大量の仕入れ、それに、味噌・醤油は市原刑務所で受刑者が作った『自家製』のものを使っているし、『庁炊（ちょうすい）』（受刑者自身が料理を作る）だから、随分と値打ちのあるものが食べさせられています。いわゆる『作り賃』はただですから。職員は朝食三百五十円、昼食三百円、夕食三百五十円で所内給食がありますが、これなどはすべて仕入れも、味噌も醤油も、一般社会と同じですし、作り賃も光熱水料も有料ですから、むしろ、受刑者の方が豪華な時があります。ですから、『副食は受刑者の方が良いの

ではないか』という職員の声もあります。」

職員給食の光熱費も別途の会計とのこと、公私の区別が厳密に実施されていることが分かります。職員の転勤などで、トラックへの引越し荷物の運搬を依頼すれば、必ず、その受刑者への賃金を国庫に支払うことにもなっています。そして、個々の受刑者には『賞与金』として一定の金額が支給される仕組みになっているとのことです。

六、「再犯を起こさず社会復帰を願う」

「精神病や精神薄弱など精神障害を伴う受刑者が対象ですから、それだけでも刑期を終えてからの社会復帰は思うようにはすすみません。したがって、この人たちを採用する企業の側はよほどの理解をもって対処して下さらないと、折角やる気で職場についても、ちょっとした行き違いから挫折していくケースが多いようです。そして、再び、犯罪を重ねて刑務所に帰ってくる。こんなことのくり返しで一生を送ってしまう人間もいるのです。」こうした「人の一生」を見続けてこられたからでしょう。所長さんのお話が続きます。

「教育されることを望んでここに入ってきたのではないのです。そういう人を「教育」して、再び犯罪に陥らないようにしようというのですからなかなか大変です。受刑者の中にしばしば見られる人間不信と、それを底流にした病的不安、これはまさに、教育の限界に挑む仕事とも言えるでしょう。『上地焼き』と呼んでいる「焼き物」や園芸作業など「土」に親しむ活動を通して「心の自由」を求めてもいます。

最近では、貸せい剤などの「薬物」常用の影響による犯罪も多くなっています。社会の理解と受刑者本人の立ち直りによって、再び犯罪を起こさず、立派に社会復帰していってくれることが、私たちの願いです。」

来年四月からは、房宗所長さんは「上地の人」になられます。きっと、長年にわたる貴重なご経験の上に立って、「新生」上地のふるさとづくりにお力を貸して頂けるものと思います。より困難な「治療と教育」の仕事に尽くしてこられた、深い見識と貴い業績は私たち学校教育に携わる者へも多くの示唆を与えて下さいました。最後に関係資料の一部を紹介して、このシリーズ一応の終わりと致します。

【参考資料】

一、刑務所の規模

職員定員　一〇九名　　収容定員　二六七名　　総面積　七九、九八八平方メートル

構　内　三九、二五九平方メートル　　構　外　二八、二二一平方メートル　　宿　舎　一二、五〇八平方メートル

二、収容者の日課

起床　七時　　朝食　七時二十五分　　作業開始　八時　　休息　十時　　昼食　十二時　　作業開始　十二時四十分

休息　二時四十五分　　作業終了　四時四十分　　夕食　五時　　就寝　九時

三、作業内容

洋裁（布団袋縫製）　　金属組立て（自動車部品・コピー機械部品組立て）

農耕（野菜類栽培）　　紙細工（雑誌付録加工）

窯業（抹茶茶碗・花器等製作）　　絹物袋物（手袋加工）　　その他（園芸作業）

四、食生活

主食は労働の程度に応じて一日に一、七〇〇カロリーから二、四〇〇カロリーの五段階に分けられる。米七に麦三の割合。

副食は一律に給与され、一日の標準は約八〇〇カロリー以上である。正月や祝日、誕生日には特別メニューが給与され、結核患者や特殊病者には症状に応じた副食が加給される。

上地小学校　松原　晄三

七、己を犠牲に人命救助

～成瀬正雄さんの偉業～

八月三十日の中日新聞に次のような記事が載っていましたので、読まれた方も多いと思います。

我が身捨ててハッチ閉鎖

―艦長の勇気に感動広がる―

〔メキシコ市二十八日共同〕ペルー沖で日本漁船と衝突、沈没したペルー海軍の潜水艦の乗員救助の様子が明らかになるにつれ、部下を助けようとして殉職したニエバ艦長ら士官たちの「海の男」の勇気が多くの人々を感動させている。

ガルシア大統領の二十七日夜の発表によると、衝突の衝撃で潜水艦は電気系統が故障、艦内はまっ暗になった。ハッチ一つが開いているのに気付いたニエバ艦長はやみの中を、乗員を救うため、これを閉めようと船室から出てハッチへ。しかし、ハッチと船室の間のコンパートメントに閉じ込められ、押し寄せる海水の犠牲となった。大統領は「艦長の勇気に注目したい」と強調した。

いつの世でも、どこの国でもこのような尊い行為は人の心を打つものです。実は、五十年前、これと同じような事実がありました。その主人公が、上地町の成瀬正雄さんです。

今年の三月、本校教務主任の松原先生が、上地町の早川博さんを訪問しました。三普寺に伝わる「長命地蔵」（学校だより四月号掲載）取材のためです。

その折、早川さんから

「松原先生、三善寺にある成瀬兵曹長のお墓に参られましたか？」

と言われたそうです。

「この成瀬正雄さんは、郷土の隠れた偉人ですよ。わが身を犠牲にして大勢の人の命を救ったのですから……。」

「そうですか、そんな方が上地に見えたのですか。」

「正雄さんの奥さんのキミさんもお元気です。確か、お孫さんも上地小学校へ行っていますよ。」

これがきっかけで、このふるさとの先人の業績を探ってみました。

昭和十五年八月二十六日、伊号第五十四潜水艦は八丈島の沖合で夜間演習をしていた。その日は台風が近づいていて風速二十メートル、高波は十メートルに達していた。この悪天候を冒して警戒航行中、潜水艦が故障して急に傾きはじめた。大波は艦橋昇降口（ハッチ）から艦内に流れ込み、今にも沈みそうになった。この時、見張り番に立っていた成瀬兵曹は、早く昇降口の扉を閉めねばならぬと、波に足をさらわれながら扉の所に走り寄った。

しかし、この場合、自分が艦内に入って後、内側から閉めるだけの時間はない。どうしても、艦外から閉めるより外に手段はない。それは日頃の訓練がこの場合、直感的に脳裏を走ったのである。成瀬兵曹は、自分が激浪にさらわれるのは覚悟で、敢然として外から扉を閉鎖したのである。それと同時に潜水艦は無事海中に入ることができたが、成瀬兵曹は荒波にのまれてしまった。

間もなく故障が直り、艦は浮上して付近の海上を懸命に捜索したが、成瀬兵曹の姿はついに発見することができなかった。

一、成瀬正雄さんの人柄

成瀬正雄さんは、大正二年二月十三日、当時の愛知県額田郡福岡町字上地三十五番地、成瀬九市氏の長男として生まれ母は「ハル」さんといいます。

小さい頃から、温順・真面目・年長者や友人の言に逆らったことがないともいいます。一見平凡なようでありましたが、どことなく近隣の幼児とは違っていました。小学校に入り、優れた頭脳とたゆみない勉学心によって、成績優秀で家でもよく父母に孝行を尽くし、弟妹を導き、隣人や友だちからも深く信頼されていたそうです。

成瀬正雄さんが十一才の時、友だち三人と隣り村のお祭りへ出かけました。そこで、一晩泊まったが、深夜に火事が発生してしまいました。特別耳と目のよかった正雄さんは、パチパチという音、煙の匂いにいち早く気づき、とび起きました。見ると、みんなぐっすり眠っています。

「起きろ。火事だ。」

と言っても、目をさましません。とっさに、鼻をつまみました。つままれた者は、呼吸ができず、さっと目がさめました。「こっちが風上だ。こっちへ逃げよう。」ということで、無事避難できたということです。この時の落ち着き、とっさの判断力に、みんな驚いたといいます。

入団後久しぶりに帰省した時、普通の人なら、うまいものでも食べ、ゆっくり休むところを彼は違っていました。帰ってすぐに、寸暇を惜しんで父母の農作業を手伝いました。いくら真夏でも、熱湯のような田に入って、除草する姿が見られました。

「休暇で帰った時くらいは休めばいいのにねえ。本当によく働く人だねえ。」

と、いつも近所の人たちが誉めていたということです。

一一、成瀬キミさんへのインタビュー

夏の終わり、つくつく法師の鳴く頃でした。奥さんのキミさん宅を訪問しました。広いお屋敷を開け放して待っていて下さいました。松原先生と一しょに、まずお仏壇を拝ませていただきました。かもいには、若き日のりりしい成瀬正雄さんの写真が飾ってありました。

ーぶしつけなことをお伺いしますが、キミさんはおいくつで結婚されたのですか。ー

「昔のことですから、十九才ですよ。もちろん見合い結婚でね。相手の顔も、ろくに知らないで結婚しましたよ。結婚式はできませんでした。ですから、おじいさんが私を舞鶴まで連れて行ってくれました。」

ー成瀬正雄さんは舞鶴にみえたわけですね。ー

「ええ、はじめ下宿にいたのですが、私が行ってからは一部屋借りて住みました。だけど、船の上の生活ですから、一日置きくらいしか帰ってきませんでしたよ。」

ーそうですか。新婚生活はどのくらいあったのですか。ー

「それが、一年とちょっとでしたよ。それで、あのようなこと（殉職）になってしまいました。」

ー子どもさんはなかったのですか。ー

「生まれたのですが、死産でしたよ。」

ーそうすると、正雄さんの子どもさんはないわけですね。その後、弟さんとご一緒になられたとお聞きしていますが……。

「そうです。その人とも十年くらい一緒にいただけです。志願して満州へ行って死んでしまいましたよ。でも、子どもは六人残してくれましてね。」

ー大変でしたね。子どもさんがおいくつの時ですか。ー

「上の子が十才くらい。一番下の子は一才だったと思います。でも、おじいさん、あばあさんがいてくれたから助かりましたよ。」

ー成瀬正雄さんはどんな方でしたか。ー

「普通の人じゃなかったですね。子どもの頃、よそへ行って火事の時、みんなの鼻をつまんで起こしたといいますから、とっさに機転がきいたのですね。休みで帰ってきても、田や畑で働き通しだったですよ。それから、目がとてもよかったようです。遠くの方へ信号を送ったり受けたりするのに都合がよかったのでしょう。信号技術が優秀で、ほうびをもらったことがあります。」

ーそうですか。惜しい時に殉職されたのですね。ー

「今となっては仕方ありませんね。でも当時のことですから、素晴らしく立派な葬式をやってくれましてね。びっくりしましたよ。舞鶴のお寺でやってくれたのですが、その頃の一番偉い人は全部来てくれたようです。」

子ども六人抱えた未亡人が、戦中・戦後を生き抜く苦労というのは察するに余りあります。

しかし、成瀬キミさんは、そんなことは全く表面に出さず、終始にこやかに話してくれました。そこには、五十年間、誠実に働き通し、立派に子どもを育て上げた自信さえ秘めているようでした。今も、朝早くから畑仕事に精を出されています。お孫さんの成瀬久美子さんも、正雄さんの血をついで、バレー選手として全国大会まで出場したほどのがんばり屋です。この成瀬家を正雄さんの霊が守っておられるのだと私は思います。

上地小学校長　嶋田　稔

笑顔で語る成瀬キミさん

八、花崗岩の上に建つ上地小学校

～上地学区の地質～

一、岡崎市の地質

「岡崎市史・自然」編を参考にしながら、岡崎市域を構成している地質にふれてみたいと思います。

岡崎市域は日本列島全体から見ると、「領家帯」（りょうけたい）と言われる区分にすっぽりと入っています。領家帯というのは、長野県の諏訪湖（すわこ）付近から九州の国東（くにさき）半島に及ぶ延長約七百キロメートル、幅三十～五十キロメートルの日本列島を地質構造的に大きく区分する「中央構造線」のすぐ北側にあたる地帯です。

日本の構造線

領家帯を構成する岩石は主に領家変成岩、領家花崗岩（かこうがん）と呼ばれています。

領家変成岩は今から約四億年ほど前の三葉虫が栄えた古生代、シルル紀から約一億五千万年くらい前の恐竜たちが活躍した中生代、ジュラ紀の間、日本列島の大半を占める地域を覆っていた海に堆積してできた砂岩・泥岩・チャート（放散虫の遺骸が堆積してできた岩石）などの岩石がもとになり、地球内部で圧力やマグマの熱などの変成作用を受けてできた岩石です。

領家花崗岩は今から約七千万年くらい前の中生代、白亜紀後期から新生代、古第三紀にかけて地下の深い所で変成作用をうけたマグマが上昇し、やがて固まったものと考えられています。これらの岩石が市域の基盤岩となったわけです。

表1　岡崎市およびその周辺地域の地質構造発達史（概要）

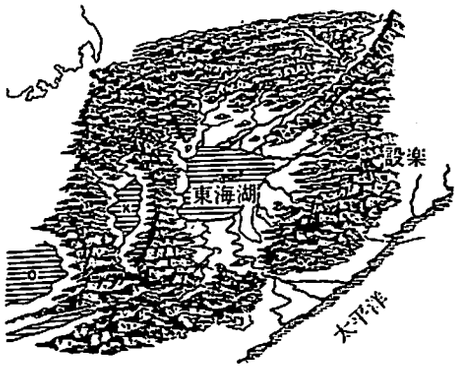
地質時代			年代（百万年）	地史
新生代	第四紀	完新世（沖積世）	0.01	沖積平野　自然堤防と後背湿地 沖積層 沖積基底礫層 陸起・沈降・海水面変動　河岸段丘　低位段丘面・岡崎埋没段丘面（大平層・越戸層） 中位段丘面（登海層・欠町礫層） 高位段丘Ⅱ面（仁木層） 高位段丘Ⅰ面（細川層・英合層・岸母層） 傾動地塊運動（猿投変動・猿投登海盆地・宝飯山地隆起） 高位礫層（明大寺層（厚 15 m），三好層）
		更新世（洪積世）	2.0	陸起・侵食・平坦化
	第三紀	鮮新世	5.1	第二瀬戸内海（東海湖）（東海層群・瀬戸層群）阿知和層（厚 20 m 以下）（亜炭を含む粘土・砂・礫層）明智礫岩層 中部傾動地塊運動（東部上昇・西部沈降） 陸化・侵食（坤平原化）　三河高原（小起伏面）の生成
		中新世　後期	11.3	陸起・海退　（設楽地方に火山活動）
		中新世　中期	14.4	第一瀬戸内海（古瀬戸内中新統）沈降・海進　岡崎層群　竜泉寺累層（厚 60 m）　溪海相（上部層）・浅海相（下部層）　海成層．含動・植物化石 本宿累層（河成堆積物・塩雑性・巨礫層）
		中新世　前期	24.6	陸起・陸化・削剝
	古第三紀		65.0	領家新期花崗岩類の貫入・固結　武節花崗岩，伊奈川花崗岩 武節花崗岩による接触変成帯（紅柱石ーカリ長石帯）
中生代	白亜紀	後期	97.5	領家古期花崗岩類の貫入・固結　天竜峡花崗岩，神原花崗岩 塩基性火成岩の貫入・固結・変成
		前期	144	領家変成作用　低圧高温（領家変成岩（珪質・泥質・砂質片岩～片麻岩）） 中圧低温（紅柱石帯・珪線石帯・珪線石ーカリ長石帯）
	ジュラ紀		213	陸起 本州地向斜の海　硬成作用・変形（砂岩・泥岩・チャート） 沈降（堆積層）
	三畳紀		248	
古生代	二畳紀		286	
	石炭紀		360	
	デボン紀		408	
	シルル紀		438	
	オルドビス紀		505	
	カンブリア紀		590	
先カンブリア時代				

年代尺度は Harland, W.B. ほか（1982）による。

岡崎市および周辺地域の地質構造発達史概要

岡崎市域に広がる花崗岩は、細粒〜中粒の白雲母・黒雲母花崗岩で「岡崎みかげ」として全国的にも有名です。新生代の新第三紀、中新世前期にあたる約千七百万年くらい前になると、長野県南部から広島県西部にいたる東西約五百キロメートル、南北約八十キロメートル、面積約三千平方メートルの地域は沈降が進み、やがて海となりました。この海のことを古瀬戸内海と呼んでいますが、岡崎もこの一角に入っているわけです。この時代に堆積した地層は岡崎層群といい、やがて、中新世前期の末になると、地盤が隆起し始め徐々に干上がっていきました。その後中新世の末になると、伊勢湾を中心とした沈降盆地が形成され、市域もその東部に位置してしていました。面積は、約四千平方キロメートルで、そこに、まわりから、礫（れき）・砂・粘土などが運び込まれ堆積してきていきました。

この盆地は淡水の湖であったと考えられ、東海湖と呼ばれています。



矢田川累層堆積のころの東海湖と古地理

第四紀更新世の前期から中期になると、岡崎市域は猿投碧海（さなげへっかい）盆地と呼ばれる低地となり、三河山地から運び出された礫が堆積して明大寺層と呼ばれる地層が形成されました。この明大寺層が明大寺・甲山（かぶとやま）・愛宕（あたご）・百々（どうど）付近の五十〜六十メートルの小高い丘をつくっているのです。

第四紀更新世の中頃から三河山地から流れていく矢作川や乙川などが大量の砂や泥・礫を運び出して市域を始め下流部に堆積させていきました。そこにくり返し起こった地殻変動や海水面変動のため、市域には大きく分けて三つの段丘面が形成されました。

上地小学校は、そのうちの一番古い時代に形成された高位段丘面上にあります。矢作川や乙川によって深く削られた谷も、約一万年前に終わった氷河期のあとの完新世の時代になると、三河山地から運び出された土砂によってどんどん埋め立てられいきました。

また、岡崎市南部では、後氷期の海面上昇のため海の堆積物によって平野が形成されていきました。

これらの経過を今一度まとめてみますと、岡崎市域は領家変成岩、花崗岩を基盤岩として、その上に、主として市の西半分に第三紀・第四紀層が覆っているというわけです。

二、上地町付近の地質

やや専門的になりますが、福岡町・上地町付近の地質について「岡崎市史」に基づいて述べてみます。

福岡町・上地町一体の台地、福岡町の御坊山（ごぼうやま）から大廻り（現在は福岡小学校校区）にかけてみられる露頭には、花崗岩、領家変成岩、チャートなどの礫を含む砂礫層や含砂礫層を観察することができます。若松町大廻りの国鉄踏切り付近には、粘土層の上に、厚さ五メートルほどの砂礫層がのっています。

上地小学校の台地と上地八幡宮の台地との間には、十八メートルほどの鞍のように盛り上がった部分（東海金属工業がある場所）があります。ここは岡崎市域を形成する基盤岩の上に風化した粘土層が重なり、その上にチャート礫を含む砂礫層が覆っています。こうして、上地町は高位段丘面にあるわけです。

三、地層の硬さを表わすボーリング資料

校舎を建築する時、必ずボーリング調査を行ないます。それによって、ボーリングコアサンプル（ボーリングをした時に得られる土質資料）が得られ、コアサンプルを観察すれば、地下の様子や地層の特徴をかなり詳しく知ることができます。

ボーリングの資料は、普通、一メートル掘り下げるごとにコアとして採取したサンプルと土質柱状図からなっています。この土質柱状図には、工事名、年月日、標高、水位、掘削深度、層厚、地質の色、構成物、メモなどが記され、標準貫入試験（N値）の数値とグラフが添

えられています。

標準貫入試験（N値）は、地層の硬さを表わす数値で、一メートル掘り下げるごとに六十三、五キログラムのハンマーを七十六センチメートルの高さから落下させ、外径五十五センチメートルのサンプラーを三十センチメートル沈ませるのに何回打ち込んだかを示したものです。例えば、N値12、あるいは、12/30と書かれている場合は、十二回ハンマーを打ち込んで三十センチメートル沈んだことを表わしています。また、50/2と書かれている場合には、五十回打ち込んでも二センチメートルしか沈まなかったことを表わしています。つまり、N値の数字が大きければ、硬くてしまった地層であり、小さければ、やわらかくてしまりの悪い地層ということができます。

四、上地小学校のボーリング資料

上地小学校でボーリング調査をしたのは十五か所です。そのうち、コアサンプルが入った六つのサンプルケースが学校の理科室の戸棚に納められています。NO1 から NO6 までです。

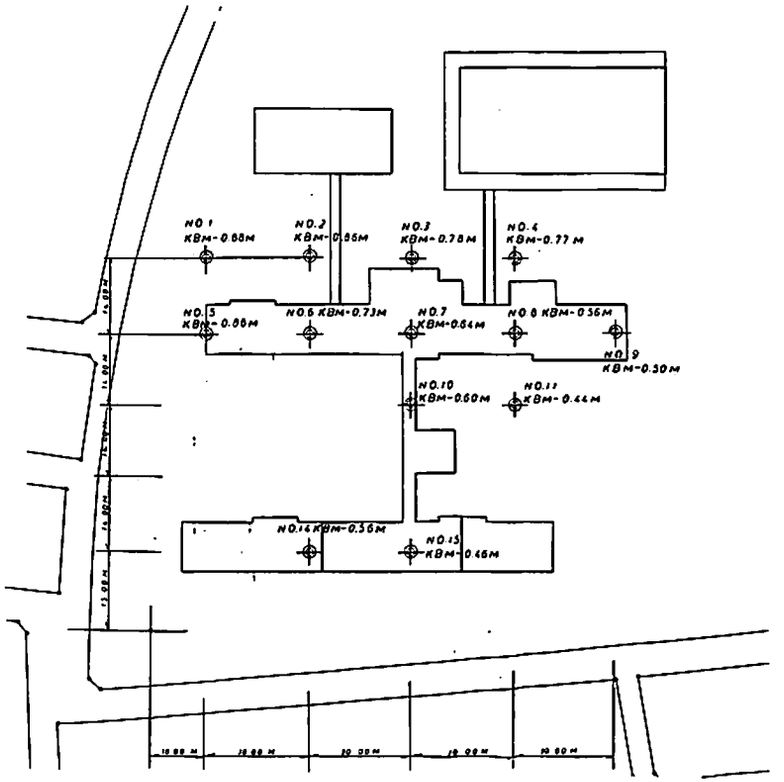
コアサンプルのいずれも、ほとんどよく似た地質を示しています。六十センチメートルから最高六、九メートルの盛り土が表面を覆い、その下に真砂（まさ―風化した花崗岩で砂状となり、大変もろくて【さばつち】とも呼んでいる―）が厚く続いているわけです。

一、ボーリング地点 NO1

ここは、校舎の平面図を見ますと、京が峰の南端にあたります。ですから、校地を整備していく場合、他の面より低くなってしまいますので六、九メートルの盛り土を入れて平らにしたものと思われます。真砂の部分は、他のボーリング地点に比較して相対的に硬く、上層部から高い密度の地質を示しています。（N値が大きい）色調は灰色を主体としたもので、青→褐→茶と変わっていきます。

二、ボーリング地点 NO2

真砂の密度は、初め非常にゆるく、徐々に密になっています。上部は全体的に雲母片が入っています。雲母は花崗岩を構成する鉱物の



上地小学校のボーリング地点

一つです。下部になるほど、粒子も粗くなり、礫も混入しはじめています。色調は、全体として褐色です。

三、ボーリング地点 NO3

NO2 の地点とほぼ同様です。

四、ボーリング地点 NO4

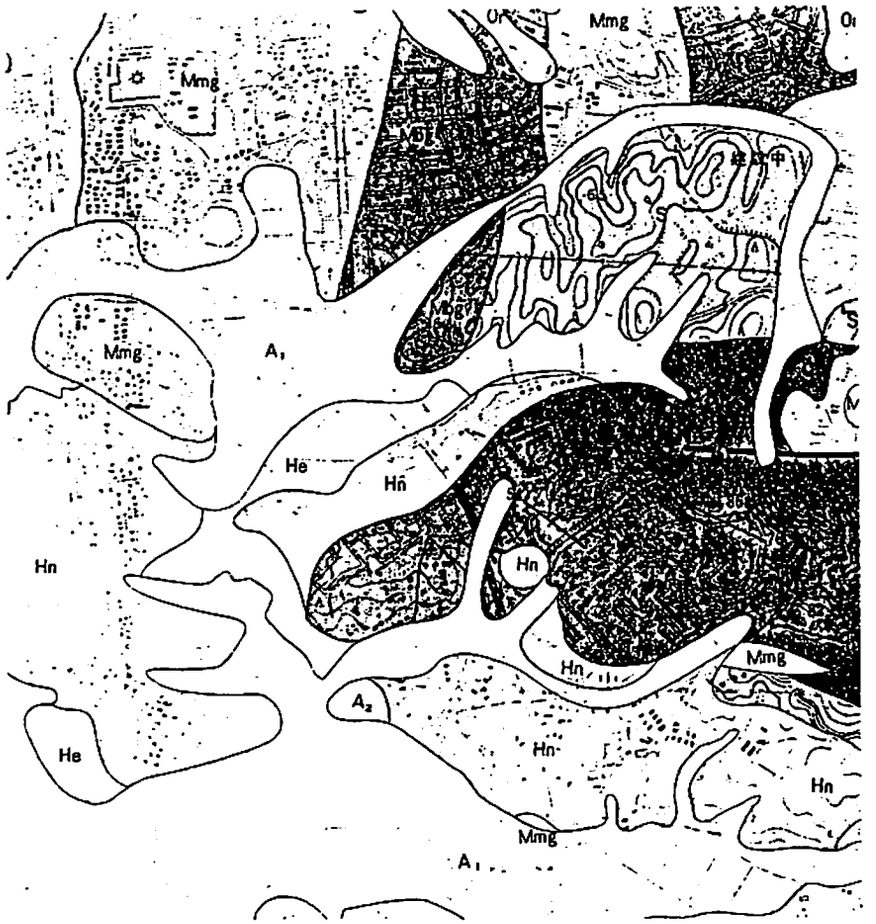
真砂の密度は NO2 ・ NO3 と同様です。七メートルの所には、粘土化した層があります。色調は、他の地点と比較して、灰→黄→褐→褐灰→黄褐と変化に富んでいます。

五、ボーリング地点 NO5

真砂の密度は他の地点と比較し、ゆるい層が最も多く堆積しています。例えば、NO3 の十一メートル地点ではN値が五十二であるのに、NO5 では十一で、およそ四十の差があります。全体的にも粘土化が進んでいて、水も他の地点に比較し、多く含まれています。

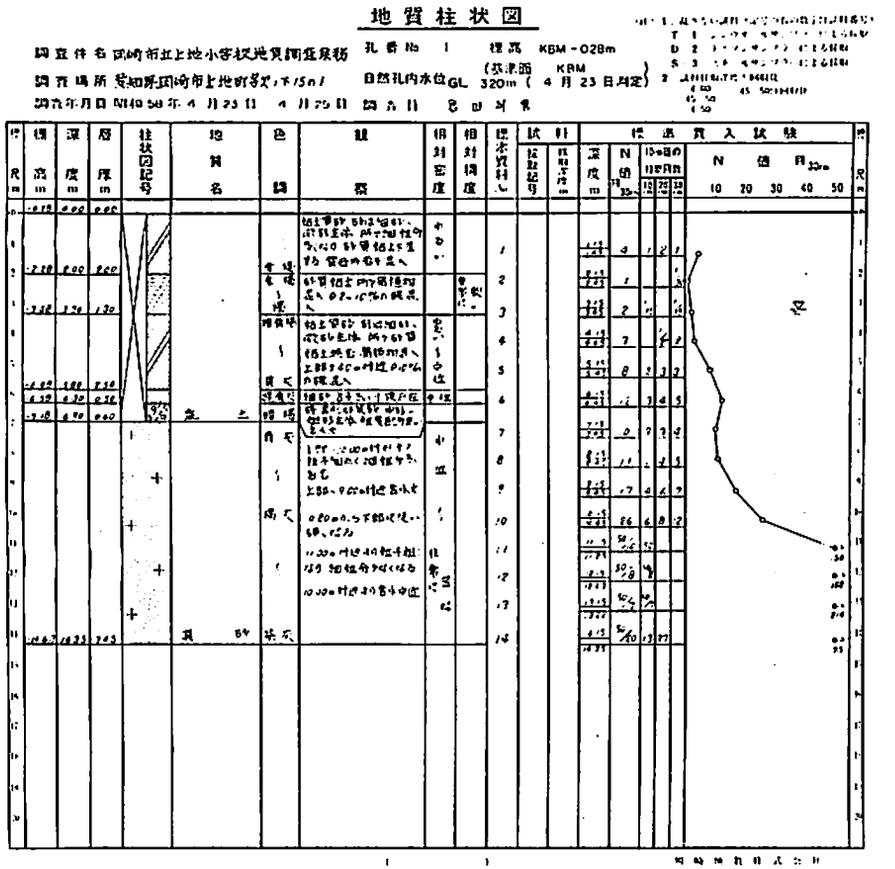
六、ボーリング地点 NO6

真砂の密度は十メートル付近まで、「ゆる



上地地区地質図（岡崎市史・自然編より）

S…領家変成岩（堤ケ入、大谷坂・上大谷坂）
Mｂｇ…中粒黒雲母花崗岩（上地小学校、若松東２・３丁目）
C…領家変成岩（医療刑務所、中長根）
Ａｌ…谷底平野・はん濫原堆積物（大谷、地光寺、東畑）
Ｈｅ…中位段丘碧海層ー砂礫・砂・泥ー（横手野、二反田、向畑）
Ｈｎ…高位段丘ー砂礫・砂・泥ー（甚九田、善十林、馬乗）
Ｍｍｇ…中粒白雲母黒雲母花崗岩（東海金属、小畑）



い」～「中位」の状態が続いています。

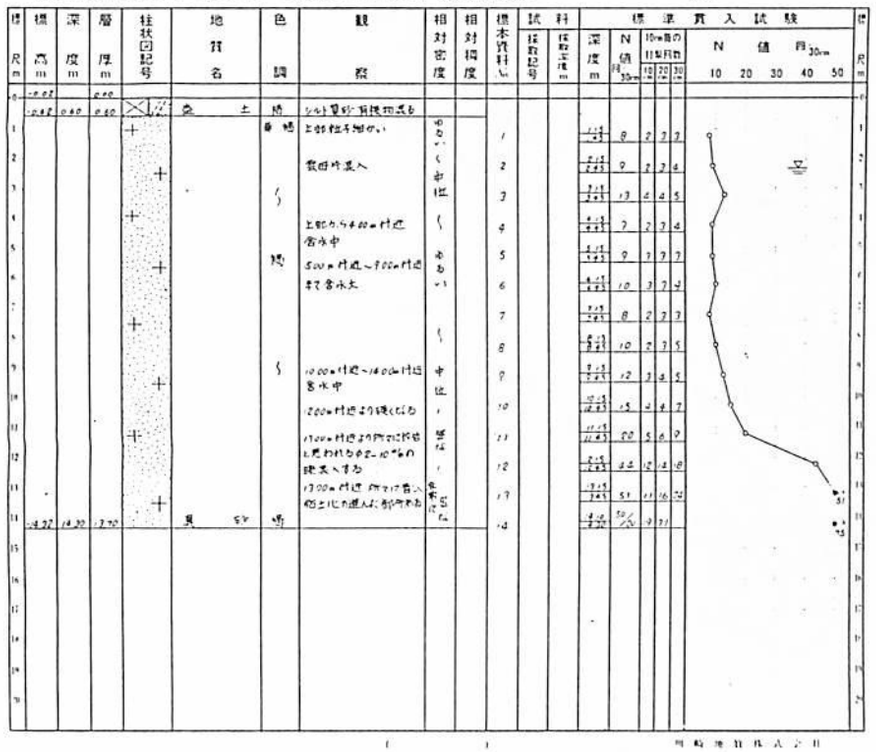
十一メートルを越すと、急に密になっていきます。NO2に見られたように、二メートル付近には、雲母片も混入しています。

十三メートル付近には、著しく粘土化の進んだ部分もあります。色調は全体として褐色です。

以上、ボーリング地点を概観してみたように、ほとんど単一の地層で変化がありません。

盛り土を除くと、どの地点も（おそらくNO15の地点まで）真砂です。岡崎市域を構成する地質が領家花崗岩と変成岩ですから当然のこととも思います。

まさに、上地小学校は真砂の上に建てられた学校と言うことができます。



上地小学校地質柱状図

紙数の関係で十分な記述ができず、分かりにくいところが多いと思います。

これを機会に、発展途上にある上地学区の自然について、更に実地調査などを進めていきたいと思います。

上地小学校　青木　純

九、奥山田池物語

私が初めてここ旧若松町字東三田ケ入の地内に入ったのは、昭和四十五年の早春で節分の頃でした。よく晴れた寒い日でしたが、北側を背にした細い山道は、春近しを思わせる暖かさでした。少し坂を上ると、目の前に突然、青く澄んで引き込まれそうな池が見えました。それが、奥山田池との最初の出会いでありました。

周囲は深い山に囲まれ、満々と水をたくわえて静まりかえっていました。ただ一人、山の前に立たされた不気味さで、身のひきしまる思いでした。池の堤防下は山田が続き、はるか西の方向に上地の村落が点在するのを眺めて、ホッとした気分にひたったことをはっきりと思い出します。

池の左上山頂に「荒薙（あらなぎ）神社」の社が木の間に見え隠れしています。池のほとりに、奥山田池の改修記念碑が建っています。その少し奥へ入った所に、「白竜さん」のほこらが薄暗い木立の中で池に影を落しています。

池のほとりの山道を更に奥へ進むと、ますます木立も深くなり、池も山にそって広がっていきます。意外に奥深い池だったという印象が今も鮮やかに残っています。山あいの細長い荒れた山田から、チョロチョロときれいな水が池に

改修工事前の奥山田池（柴田　勝氏提供）

落ちていました。

その奥山田池も、昭和四十七年春から始められた区画整理事業によって一変しました。池も小さくなりました。ずいぶん明るい池になりました。昔の深々たる神秘をたたえた池ではなくなりました。

周囲の風景も面目一新、勤労福祉会館の夜景が奥山田池に映える風情は想像もできなかったことです。しかし、区画整理による宅地化によって、家庭からの雑排水による池の汚れがひどく、水質浄化は真剣に取り組まなければならない課題になってきました。

それは、「荒薙神社」の森と澄んだ奥山田池を再現して、後世に残すことは私たちの責務だとも思います。

今年九月、我が若松東の町内で奥山田池の浄化を進める運動を申し合わせました。奥山田池をきれいにすることは、下流の砂川の水質浄化にも通じることです。そのため、先ず、家庭からの雑排水を少しでもきれいにしようと、市役所の担当者に来て頂き勉強会を開催したりもしました。

その折、奥山田池の水質検査結果を見せて頂き、汚れのひどさを実感致しました。その結果、私たちは次のことを申し合わせました。

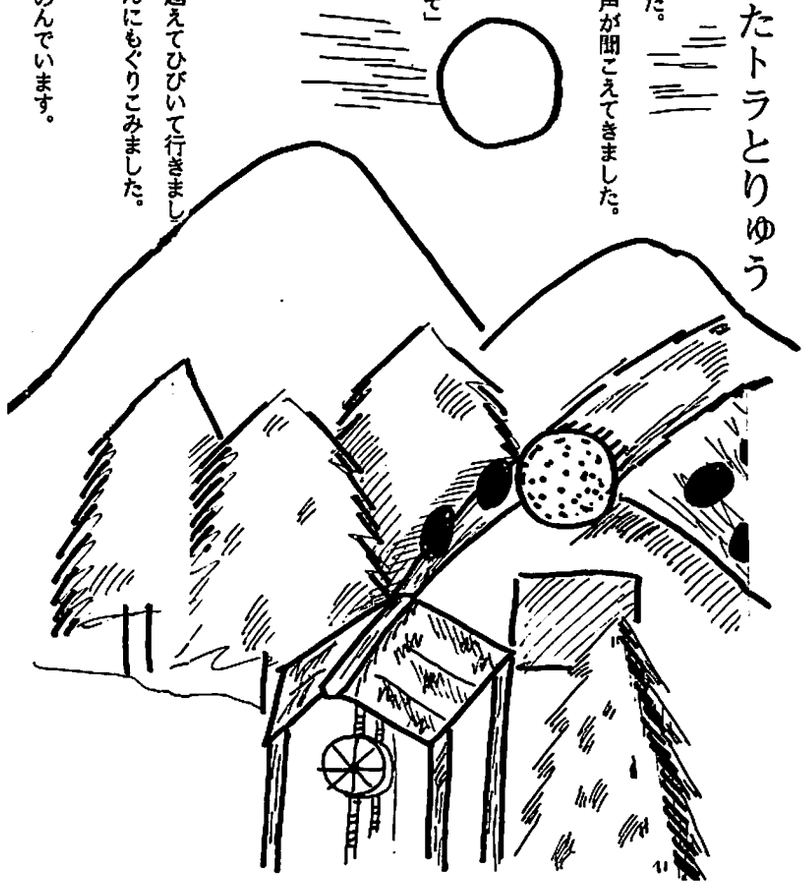
一、台所の調理くずや食べ残しはなるべく流さないようにする。
二、食用廃油は流さないようにする。
三、洗剤は正しく計って使う。
四、屎尿浄化槽は正しく使い、定期点検や清掃を実施する。

しかし、この運動も、我が町内だけでは、その効果は上りません。広く、上地、緑丘の関係地域が協調して実施しなければならないことはいうまでもありません。尚、根本的な対策は、下水道の完備によって家庭排水が奥山田池に入らないようにするより外にありません。

一日も早く、澄んだ奥山田池で魚釣りの楽しめる日が来るのを切望いたします。

上地学区社教委員長　柴田　勝

十、絵からぬけだしたトラとりゅう



5年　落合　直子

青い月がこうこうとかがやいていました。

上地の山の方から、何ものかのうなり声が聞こえてきました。

ウォー　ウォー

「あ、あの声は何だ！」

「オオカミのうなり声かも知れんぞ」

「いやちがう。あれはたしかトラの声だぞ」

「えっ？トラ？」

「そうだ。トラの声にちがいない」

「どうしてここにトラが……」

「そりゃわからんが……」

ウォー　ウォー

うなり声は、高く低く、野を越え川を越えてひびいて行きました。村の人はふるえながら、またふとんにもぐりこみました。

こちらは高須（福岡町）の無尭寺です。

おまいりをすませた村の人が、お茶をのんでいます。

「このごろ上地の方でトラが出るちゅうが、本とうかのう」
「うん。何だか夜中におっそろしい声で、月に向かってほえとるちゅうだ」
「わしのしんせきのじいさんは、夜中にちゃんと見たそうだ。牛くらいでかくて、目がらんらんと光っとるということだ」
「どこから来たのかのう」
「トラは千里行って千里帰るというから、こうらい（韓国）の方から来たのかも知れん」
「あぶない、あぶない。夜中にゃ出歩かん方がいいな」
こんな話をしている時、上の方でキラッと光ったものがあります。あっ、と思ってみんなが上を見上げました。天井には、りっぱな竜の絵がかいてありました。りゅうの目玉が光ったようです。
「なんだかきみが悪い。さあ、帰ろう帰ろう」
みんな急いで帰ってしまいました。

その日の夜も、またウォー　ウォーと、うなり声がしました。すると、どこからともなく黒い雲が出てきて月をかくしてしまいました。急に風が出て、大つぶな雨も降り出しました。
ヒュー　ヒュー
ザー　ザザー
田の上はいつのまにかあらしになりました。
ピカッピカッといなづまも走りました。

５年　落合　直子

朝見ると、イネはくしゃくしゃ。田んぼに大きな足あとがいくつものこっていました。
「ややや、トラが田んぼであばれたらしいぞ」
「おかしいなあ。トラだけじゃないぞこりゃ」
「急にあらしがふくなんてへんだ」
「それにしても困ったもんだ。これじゃイネがだいなしだ」
次の日もやっぱり夜中にあらしがふきました。
そこで、村の人は集まって相談しました。
「これじゃとてもがまんできん。今夜はみんなで番をして、田んぼをあらすやつをやっつけるのだ」
竹やりを作ります。かまをとぎます。たいまつも用意して夜のふけるのをまちました。
ジャンジャンジャンジャン
火の見やぐらの半鐘が、けたたましく鳴り出しました。村の人はとび出して行きます。
わあー　わあー
出たぞー　出たぞー
どこだー　どこだー
わあー　わあー
やっつけろ　やっつけろ

５年　落合　直子

早がねが鳴りつづけます。
ジャンジャンジャンジャン
「あー、あれはりゅうだぞ」
「りゅう、りゅうが出たぞ」
ギラギラ光る目、大きな赤い口、たいまつにてらされて、りゅうは高須の方へ飛んで行きました。
「トラもおったぞ」
「あっちの方へ行ったぞ」
わあー　わあー
「トラが代官屋敷へかけこんだぞう」

夜が明けました。
「ううん。あのりゅうはお寺の天じょうからぬけ出したにちがいない」
「じゃあトラは？」
「実は、代官屋敷早川家にも本物そっくりのふすま絵がある。それかも知れん」
「絵からぬけ出したトラとりゅうが、田んぼでけんかをしておっただのう」
「それにしても困ったものだ。代官さま。何とかしてもらわんことにゃ……」
「そうかそうか、みんなにめいわくをかけた。すきなようにしてくだされ」
そこで、みんなでちえを出しあい、トラもりゅうも、目つぶし（目を黒くぬる）をしました。こうすれば、もうぬけ出ることはありません。それからは田んぼをあらされることはなくなったということです。

上地小学校　嶋田　稔

５年　落合　直子

資料「早川家（上地町下屋敷六十一）」について

承応二年（一六五三年）から三州額田郡上地に居住し、松平備前守に仕え、百石の奉行職となる。

天保三年（一八三二年）上地「早川家」六代目に当たる斯伊熊助（しいくまのすけ）は画家として数々の名作を残した。この話に登場する虎の絵も斯伊の作で早川家に現存する。十二代目の早川博さんによれば、上地早川家の系図は次の通りである。

承　応　二　年（一六五三年）　吉久五左ェ門
寛　文　六　年（一六六六年）　吉親武左ェ門
元　文　六　年（一七四一年）　吉尚武左ェ門
寛　保　元　年（一七四二年）　光親又左ェ門
寛　政　十二年（一八〇〇年）　守親武左ェ門
天　保　三　年（一八三二年）　斯　伊　熊　助
天　保　十一　年（一八四〇年）　光章吉左ェ門
天　保　十四　年（一八四三年）　佐　兵　衛
文　久　三　年（一八六三年）　重　治
明治四十一年（一九〇八年）　嘉　一　郎
昭　和　十二　年（一九三七年）　久　胤

早川家に伝わるふすま絵の虎

十一、「春の七草」採集

～「上地春の七草」も選定～

無病息災を願って行なわれる「春の七草がゆ」は、一月七日です。

「区画整理以前の上地には、七草をどこでも摘むことができた。しかし、今ではどうでしょうかねえ……。」

学区のお年寄りが、昔を懐かしんで話されます。三学期も始まったばかりのことでした。

「どうでしょうか、上地学区で春の七草を摘むのは、もう無理なことになってしまったのでしょうか。」

自然科学に特別の興味と知識をもつ本校の青木先生に話をもちかけてみました。青木先生は、しばらく考えてから、こんなふうに語りました。「きっと、あると思いますが、学校の『雑草博士』壁谷君と一度探しに出かけてみましょうか。」

もし、青木先生の言われたように、この上地学区に「春の七草」があれば、こんな素晴らしいことはない。スーパーで「七草セット」を買わなくても、家庭の食卓で地元の七草がゆが楽しめる。早速、七草「探索」をお願いすることになりました。

そして、いよいよ、大きな期待を背に、二人の「七草」採集の日がきました。

一月二十一日（土）の午後。気象観測史上最も暖かい一月と話題になっていた矢先ですが、この日は、あいにく久し振りに冷たい北風が吹きつける悪天候になってしまいました。以下、その模様を紹介しましょう。

校内にも二種類を発見

青木先生と壁谷君の予想では、ナズナ・オギョウ・ハコベラ・ホトケノザはあるだろうということでした。学校の「ふれあい農園」に、

だいこん（スズシロ）・かぶ（スズナ）が栽培してあるから、あと、セリだけあれば校内に全部あることになります。

しかし、日本全土の畑や道端、空き地等どこにも見られるというナズナを確認することができず、結局、オギョウ・ハコベラ・ホトケノザの三種類にとどまってしまいました。ナズナと同じアブラナ科のタネツケバナは発見することができました。

学区で発見「春の七草」

見通しが甘かったのか、校内で三種類しか発見できず、あとは学区に、残る希望を託して出発しました。上地学区で地元の七草がゆを作ることができるのか、大きな期待を抱いて学区に足を向けました。壁谷君がビニル袋と採集用ハサミを手に、胸をはって先頭を歩き出しました。そして、次々、しっかりと大地に根を張って育つ七草を確認することができました。

セリ　八区の田んぼ。あぜのいたるところ（大谷・岳井・前田・東畑・地光寺）にありました。草たけが短く、若葉のため採集するのに苦労しました。

ナズナ　八区の岳井と前田公園付近の道端。これは、ありそうで、なかなか採集できず、半ばあきらめかけていたら、偶然に前田公園付近の道端で群れをなしていたのを発見でき、思わず手を取り合って喜びました。

オギョウ　八区の田んぼ。あぜのいたるところ。これは、チチコグサ・チチコグサモドキとよく似ているので注意して採集しました。

ハコベラ　八区の岳井の道端。可愛いらしい白い花を咲かせていました。近くに、オオイヌノフグリ・ヒメオドリコソウ・ホトケノザが青紫や紫の美しい花を咲かせていました。

ホトケノザ　八区の田んぼ。あぜのいたるところ。これは、コオニタビラコと呼ばれる雑草でオニタビラコと間違えないように注意して採集しました。

これで、「ふれあい農園」のスズナとスズシロを加えれば、すべて上地学区で「春の七草」がそろったことになります。宅地開発が、今尚、急速に進行を続ける中で、大変感激的な発見をすることができ嬉しくなりました。

壁谷君と青木先生は、学校に帰るとすぐ、採集した五種類の七草をプランターに移植して下さいました。今、職員室の南側に設置し、子どもたちの関心を集めています。

「上地春の七草」を選定

二人は、更に、夢のある話題に移りました。「上地ならではの『上地春の七草』を決めよう」ということです。紹介しましょう。

壁谷君の案

ヨメナ（キク科）タネツケバナ（アブラナ科）ノビル（ユリ科）ミツバ（セリ科）タンポポ（キク科）ヨモギ（キク科）ミミナグサ（ナデシコ科）

七草がゆにした時、味のバランスはよさそうですが、キク科から三種類含まれているのが難点とも言えます。

青木先生の案

ヨメナ（キク科）タネツケバナ（アブラナ科）ノビル（ユリ科）ミツバ（セリ科）タンポポ（キク科）ヨモギ（キク科）ミミナグサ（ナデシコ科）

それぞれの科から選ばれていてよいが、スイバ・オオバコが入っているので味にくせが感じられそうです。

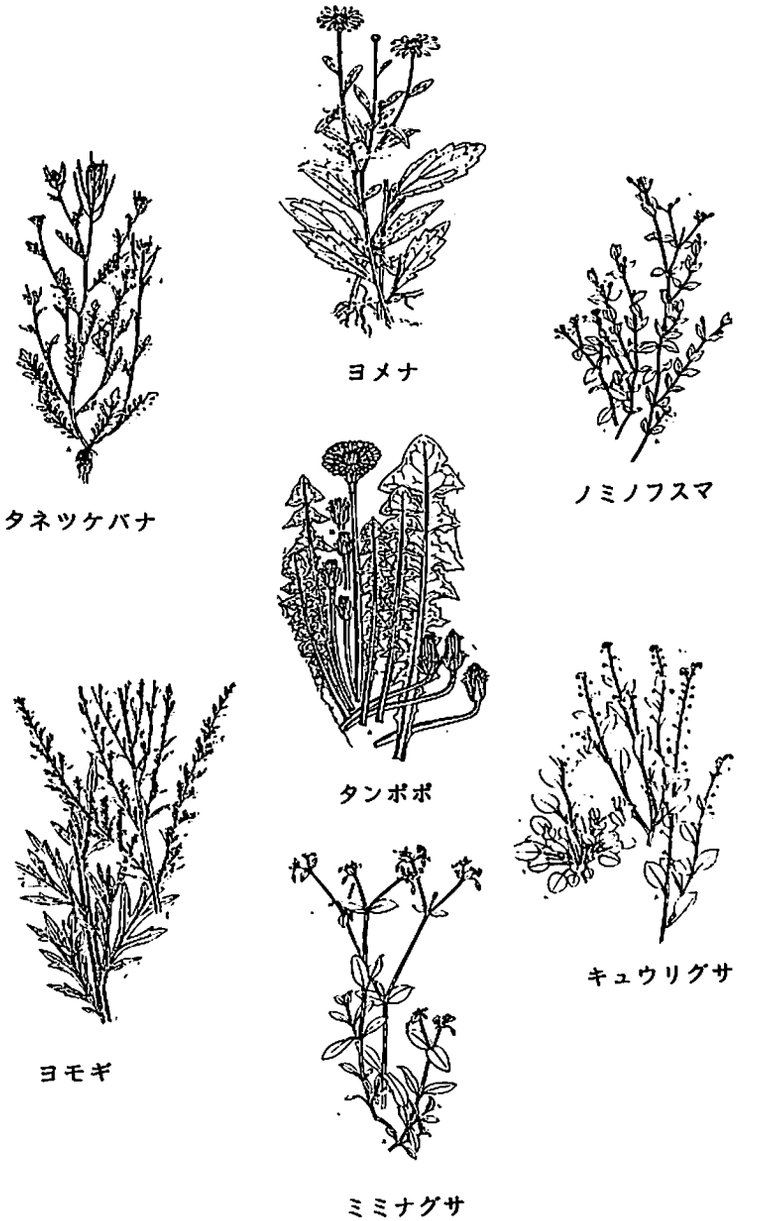
こうして、両者の案を突き合わせながら、落ち着いた「上地春の七草」が次のものです。いかがでしょうか。ぜひ、皆さんの声をお聞かせください。

ヨメナ（キク科）タネツケバナ（アブラナ科）ノミノフスマ（ナデシコ科）タンポポ（キク科）キュウリグサ（ムラサキ科）ヨモギ（キク科）ミミナグサ（ナデシコ科）

キク科が三種、ナデシコ科が二種も含まれているので、やや選択の幅が狭い感じもします。しかし、昔から言い伝えられているように、この種の雑草は味がよく、誰にも食べやすいという利点には魅力がありそうです。ぜひ、一度、子どもたちと一緒に味わってみたいと思います。

上地小学校　松原　晄三

春の七草



上地春の七草

十二、上地八景

～第一次案の発表～

「奥山田池に映る勤労福祉会館の夜景は素晴らしいですよ。特に土曜日や日曜日の夜は宿泊客がいるからでしょうか。室内灯が池に映えて昼間とは違った美しさに、思わず立ち止まってしまうほどです。」

若松東にお住いの柴田勝社教委員長さんが、話されました。二月十八日（土）の午後、勤労福祉会館前でのことです。今年度四月の上地学区総人口は七千五百人でしたが、小学校の児童数が増加の一途をたどるのと同様に、日毎にその数を更新中のこのごろです。

「開校六年が過ぎようとしている今、上地の由緒ある史跡や自然景観、開発目覚ましい都市の姿など、『上地八景』とでもいうものの案を学区の皆さんに提供したらどうだろうか。」

こんな話がまとまって、この日、都合のついた柴田勝社教委員長さんをお誘いし、学校の三津井・背木・松原が候補地に出かけたという次第です。

写真撮影は三津井秀夫校務主任補佐が担当し、解説は四年生担任の背木純先生が原案を書くという運びとなりました。本校に赴任して日も浅いことから、的はずれな案にならないよう地元市議会議員渡辺五郎氏や学区総代会長の成瀬司さんにもご意見を賜わり、やっと「第一次案」にこぎつけました。

「写真を撮ってみて改めて上地の美しさに感激した。上地の四季折々を観察し記録すればもっと素晴らしいだろう。」

三津井先生の言葉のように、この案をもとに皆さま方から様々のご提案を頂きながら「上地八景」を決めて頂けたらと願っています。

以下、背木先生の原案をもとに学区をめぐってみたいと思います。

上地小学校　松原　晄三

一、奥山田池

奥山田池は、岡崎市南部の丘陵地帯南斜面に多く集まっているため池の一つです。この付近は山が浅くて水量が少ないため、かつては潅がい用の水源として貴重なものであったと思われます。

現在は宅地開発が進み、水田も減ってしまったので、当初の役割を終えてしまっているようです。奥山田池の場合もこの例にもれず、今では砂川の遊水池、あるいは若松地区の生活排水路的な利用価値が大きくなっています。

しかし、開発が急ピッチに進行し、周辺が一気に都市化の様相を見せているため、学区民にとっては奥山田池はほっと心をなごませてくれるところでもあります。

池の南側は、ナラ・ブナ・クヌギなどの典型的な雑木林です。北側はアカマツの林。これらの木々に羽を休めたり巣作りをしたり、エサを求めてやってくる野鳥もたくさんいます。水面は、冬ともなれば野鳥の天国でもあります。カイツブリ・カワウ・カルガモがのんびりと遊んでいます。時々、美しいカワセミが姿を見せてもくれます。

また、釣り人にとっても格好の池でもあります。コイ・ハエ・タナゴ・モロコ・ウナギ・ヘラブナの他に、最近では外来魚のブラックバス・ブルーギルなども住みついています。冬の陽だまりの中での釣り人の姿は落ちついた風情を感じます。

1、勤労福祉会館会館が映える奥山田池

かつては「深い山に囲まれ、満々と水をたくわえて静まりまえっていた奥山田池」（ふるさとシリーズ　9、奥山田物語）ですが、私たちは今、その面影を池の北側にひっそりと残る「白竜さん」のほこらに見ることができます。

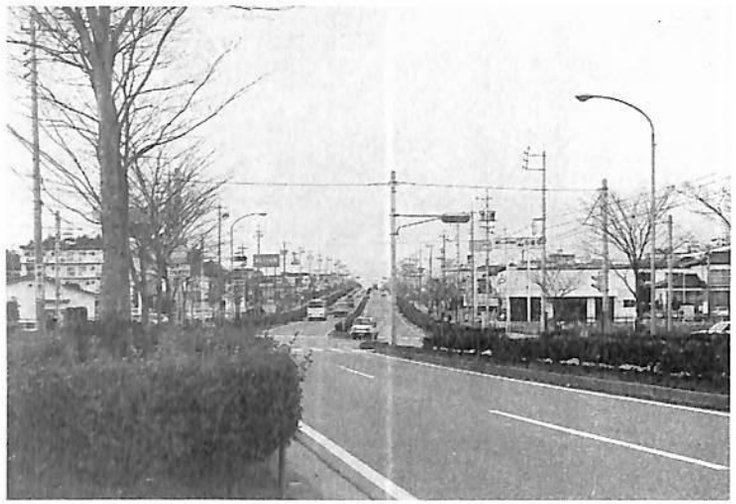
また、勤労福祉会館のナトリウム灯が水面に映える夜景の美しさは格別です。

二、国道二四八号線

岡崎市内を南北に縦断する国道二四八号線。岡崎市民の間では「ニイヨンバー」と愛称され、私たちの日常生活と深く結びついています。こういう意味では産業道路であると共に生活道路でもあるでしょう。

学区を南北に縦断する二四八号線は、市内を通る部分の中で「モスバーガー」付近で最高地点となります。何気なく通過してしまいそうですが、車で南に向かって行くと、その坂から新興住宅地としての上地学区を違った角度から眺めることができます。

計画的に街路樹が整備され、中央分離帯には、カンツバキが、歩道と車



2、上地学区を南北に縦断する国道２４８号線

道の境界にはきれいに剪定されたツツジが植えられています。そして、数メートル置きに「モスバーガー」から「サークルK」辺りまではプラタナスが、そこから南には学校木でもあるケヤキが並んでいます。

これから十年、二十年が経過する頃には、街路樹もすっかり大きくなり「ふるさと」上地の名物になっていることでしょう。

二、砂　川

砂川は上地学区を流れる唯一の川です。水源を奥山田池に発し、広田川矢作古川に合流して、やがて三河湾に注いでいきます。

区画整理事業の始まる以前の砂川は、今日のように、コンクリートによる護岸工事が施された特徴のない堤防ではありませんでした。自然堤防に近い景観で、春ともなれば、タンポポの花が咲き乱れ、ツクシ摘みの人たちで賑いを見せていました。川の水も澄んで、ハエ・モロコ・フナなどが群れをなして泳ぎ、子どもたちにとって格好の「ポンツク」場所でありました。そして、奥山田池の西側堤防から見下ろすと、圃場整備前のひなびた田園の間を流れていく砂川に心が和らいだものでした。

今、二四八号線の東から西にぬけてくる砂川の流れを見ながら、二つの遊水池の傍らに立つと、学区変貌の大きさに感慨深いものを感じます。

3、上地学区唯一の流れ砂川

四、円光山寂静寺

県道衣浦岡崎線沿いの歩道から見ると、何の変哲もない白壁と瓦屋根のお寺としか映りません。そこから、一歩境内に入ると、大きなヤマモモの木に目が止まります。その傍らに、縦九十センチメートル横幅六十センチメートルほどの石碑があります。

この石碑には、明治三十二年に堤入・大谷坂・渋田の三つの用水を増築し、上地北部を水田に変革していった畔柳五郎衛門翁の業績が記されています。明治の中頃までの上地北部の土地は、非常にやせていて、あわ・ひえ・豆類などを細々と栽培している状態でした。五郎衛門はこうした状況から、サイフォンの原理を利用して、高台の畑にも水を引き入れ水田に変えていきました。

更に、お寺の南側に回ると、北側からとはうって変わり、俗世界から隔絶されたような、まるで京都の古寺を偲ばせるような雰囲気をただよわせています。なだらかな石段と山門、それを通して見えるお寺の本堂。山門から、和服姿の女性が顔を覗かせれば、まさに、古都のたたずまいそのものと言えるでしょう。

上地に、こんな落ち着いた素晴らしい所があったのか、私たちはしばらく時の経つのを忘れて語り合いました。

4、畔柳五郎衛門翁碑が建つ円光山寂静寺

五、百丈山三善寺

上地学区最南部に区画整理事業区域からはずれた地域があります。小学校の四階から眺めると、小さな森のように見えます。その中心部に、百丈山三善寺がひっそりとしたたたずまいを見せています。

旧国道二四八号線から山門を目指して石段を登ると、西側に樹齢百年に近いかと思われるウバメガシ・アカガシ・マテバシイの大木が繁っています。昼間でも暗く、冷んやりとした空気に身の引き締まる思いがします。

三善寺は、今から約三百年前の元禄十二年、この地方の奉行職だった早川武左衛門が寄進して建造されたものです。上地町下屋敷に住んでみえる早川博さんは、その十二代目のお方です。

ご本尊の一つ、「長命地蔵」さんについては、本書の「ふるさとシリーズ　1、長命地蔵を訪ねて」に詳しく記されています。また、嶋田稔校長先生の「校長通信　3、雪の上の小さなあしあと」にも童話として紹介されてもいます。

また、本堂の左側には「抱き地蔵」も祭られ、信心深い方たちの参詣が続いています。願い事をもって、地蔵さんを抱き上げた時、軽く持ち上げられたら願いがかなうと言われています。一度、ご家族おそろいで出かけてみては如何でしょうか。幸せを呼ぶ三善寺参りとなるでしょう。

5、長命地蔵さんを祭る百丈山三善寺

六、中部電力上地変電所前の湿地

この湿地は幸田町と境を接する、学区最南部に位置し、南北につながる二つの池から成っています。宅地開発が目と鼻の先まで迫っている中で、何故か、この一帯だけが取り残されたように、冬枯れの景色を見せています。

ヨシやガマが水面を覆いつくすように繁茂してい湿地。ここをえさ場にしているコサギやチュウサギなどの野鳥。そして、長く住みついて離れないフナやコイ・ドジョウ・ナマズなどの魚や水生昆虫類が見られます。

それぞれが、その生を営み続けてきた動植物にとっては、人間にとって一見泥臭い湿地でも、かけがえのない生存の場でもあります。

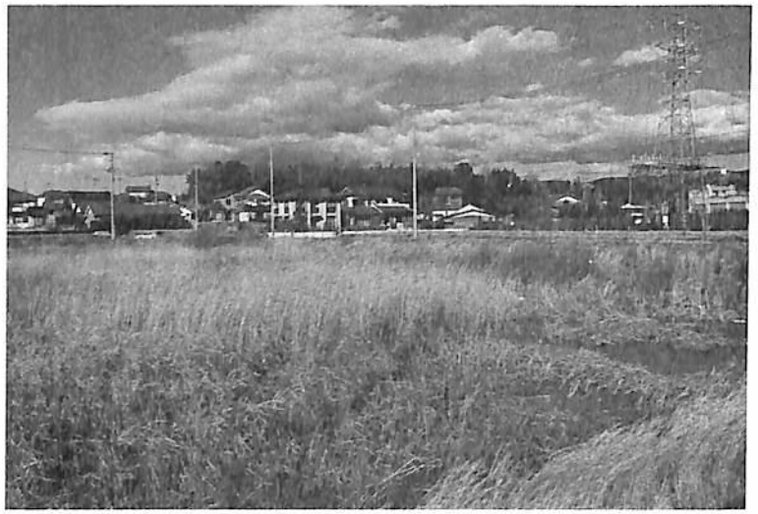
現在、宅地開発などによって、全国的に、急速な勢いで雑木林や湿地が失われています。

こうした意味からも、私たちは、この学区の貴重な「財産」をいつまでも大切に守り続けていかなければとの感を強くします。

夕暮れのほのかな光りに包まれた湿地を眺めていた松原教務主任がはっきりと言いました。

「ここは『上地湿原』と名づけたい。」

と。



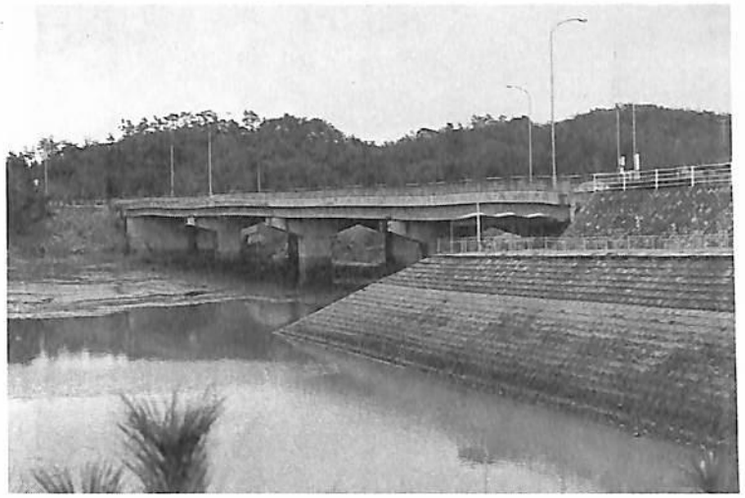
6、中部電力上地変電所前の湿地「上地湿原」

七、大谷公園

大谷公園建設の契機は、「保安林としても自然景観の上からも」必要と考えられたことによります。現在も公園建設事業が進行中ですが、見るべきものがたくさんあります。先ず〈大谷橋〉です。県道衣浦岡崎線が池の真上を横切っています。土を盛り上げて道路を開通させる方が安価でしたが、自然景観上からも治水の問題からも橋をかけるべきだということから建設に至りました。こうして、総工費四億三千万円を投じて全長百二十メートルの大谷橋が完成したのが昭和六十年の二月でした。

次に〈キャンプ場〉です。公園建設の当初計画にはありませんでしたが学区民の要望で建設が進み、今年度の夏は炊飯活動の煙が大谷の山にたなびきました。テント場七、炊事場二、トイレ一という立派な設備が整えられています。〈古窯あと〉も見逃せません。大谷の山中には、平安時代の登り窯あとが残っています。今もその地点からは、焼き台や陶器の破片が発見され、「上地焼き物師」のロマンを想像させてくれます。

更に、今年度は池のすぐ上に「東屋」風の休憩所が完成しました。真新しい銅版葺きの屋根が、夕陽を浴びて輝いています。山を一周する遊歩道の総階段数は四百八十余段、総延長は一キロメートルを越えています。



7、噴水の完成も近い大谷公園

階段を登りつめて山頂に立つと、大谷公園を一望に納めることができます。

また近く〈噴水〉が区画整理事業の完成記念として作られる予定で建設工事が進められています。「竜神さん」のほこらが取り除かれたのは淋しいですが勢いよく橋上まで吹き上げる噴水の景観は、きっと、新たな「上地八景」に登場することでしょう。

八、ドミーフーズ上地店

ドミーフーズ上地店は、学区最大のスーパーストアで、新興住宅地として発展を続ける上地地区の台所を支えています。

県道衣浦岡崎線沿いに建てられ、夕方や休日などは特ににぎわっています。本校三年生が社会科で現地学習した結果、お客は上地・福岡はもちろん幸田・柱・明大寺などからも集まり、休日は一万人、平日でも二千五百人を越えるといいます。そして、お客の三分の二は自家用車でショッピングに来るため、どのスーパーでも悩みの種となる駐車場の確保が大変とのことで、売り場面積の約五倍の現状でも不足しています。

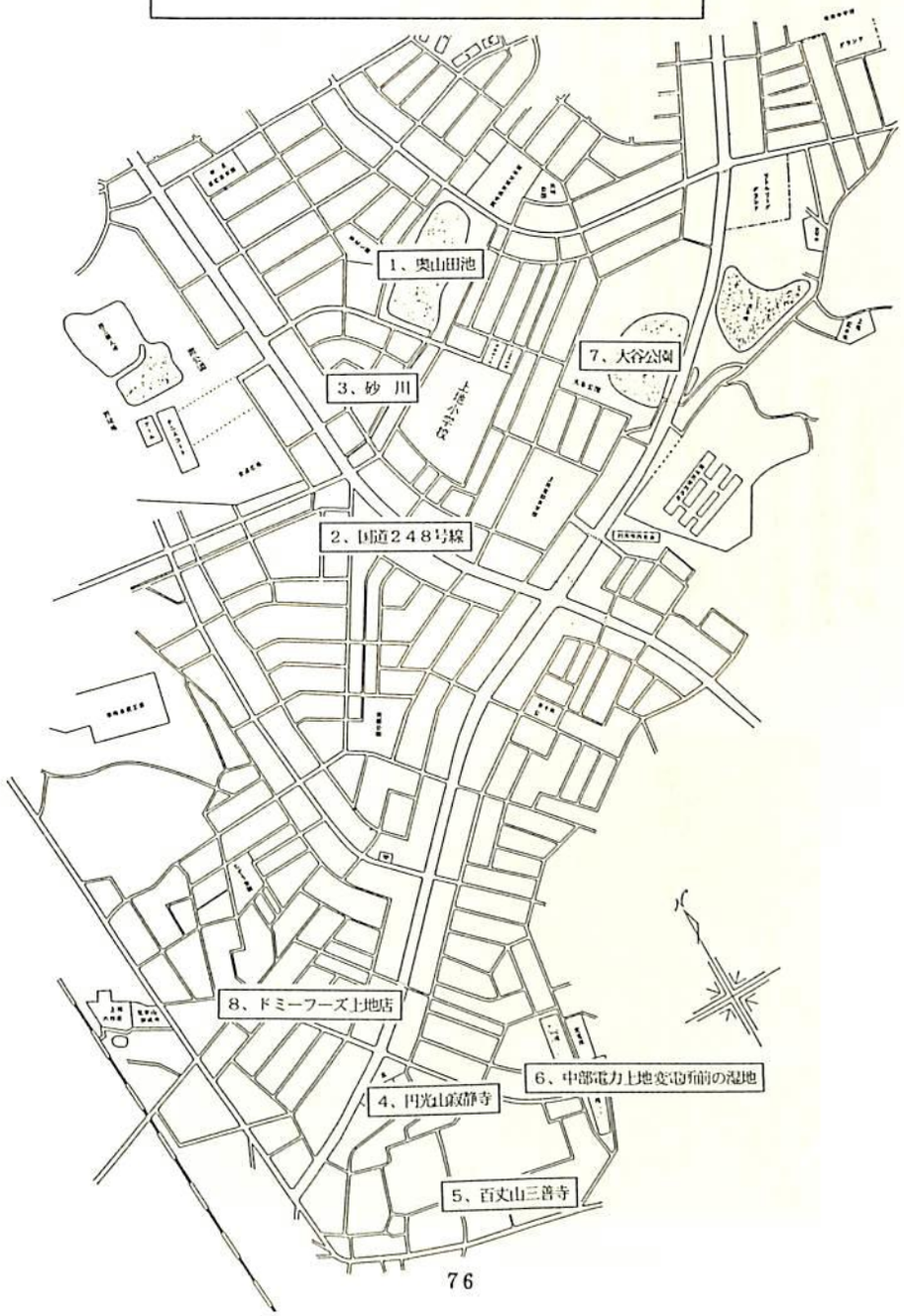
県道衣浦岡崎線が近い将来、「竜南メーンロード」と結べば、岡崎市域を迂回する環状線の役割を果たすことになり、更に今後の発展が予想されるところでもあります。

上地小学校　青木　純

8、上地学区の台所を支えるドミーフーズ上地店

二、校長通信

上地八景の所在地
（第１次案）



一、キミは虹を見たか

秋のはじめのある日。

三年生のケン太君が、学校から帰る時、急に雨がふってきました。Aちゃんのお母さんは、「まあ、どうしましょう。今朝はかさを持って行かなかったわ。」と、心配がおです。

そこで、すぐに車庫へ。ピカピカの外車を運転してお迎えです。サッーと学校の玄関へ乗りつけます。Aちゃんを乗せて、今日のできごとを親子で楽しく話し合いながら、車を走らせます。家では、おいしいおやつが待っているでしょう。

ケン太君のお母さんは、つごうでお迎えに行けません。「どうしているかしら。」と、気がかりでしたが、仕事があってどうしようもありませんでした。

学校にあった予備のかさは、もうだれか借りてしまって、一本もありません。ケン太君は友だちとぬれて帰ることにしました。しかたがありません。雨の中へかけ出しました。

道ばたに、消防ポンプ小屋があったので、そこで一休みして雨やどり。

「雨、やまんかなあ。」

空を見上げると、雲が動いています。

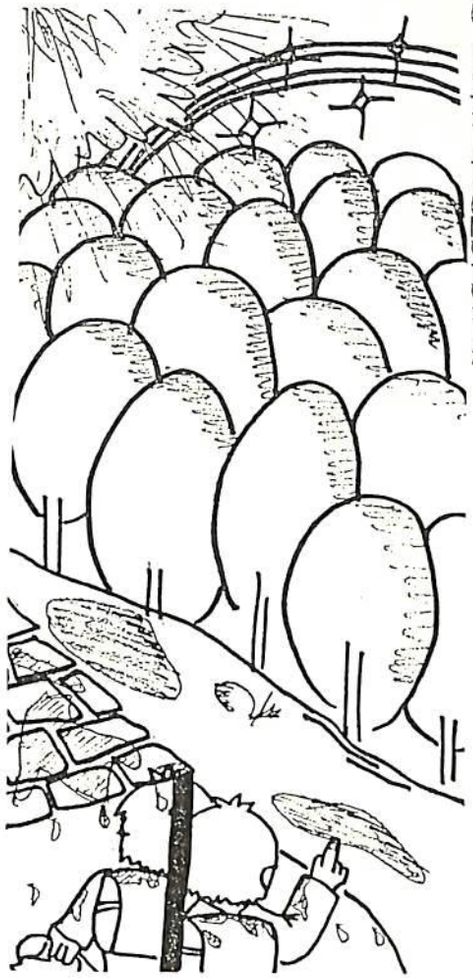
「あ、雲ってはやいね。」

「あっちの方が明るくなったよ。」

「もうじきやみそうだね。」

友だちと話しながら、また、かけ出して行きました。みぞからあふれた雨水が、道の上をいきおいよく流れています。

「あ、ドジョウだ。」
「つかまえちゃおう。」
「つるつるすべって、なかなかつかまらんね。」
ケン太君たちは、大よろこびでドジョウをつかまえ、拾ったあきかんに入れて帰りかけました。
「あ、にじだ！」
「わあー、にじってきれいだなあ！」
「ぼく、はじめて本もののにじを見たよ。」
「にじって、大きいね。」
あくる日、ケン太君たちは、教室で目をキラキラさせて、先生やみんなに、ドジョウや虹のことを報告しました。
Aちゃんは、うらやましそうに聞いていました。



5年　落合　直子

二、虫よ、鳥よ、メリーよ、安らかに眠れ

―供養塚できる―

少し古い話ですが、思い出してください。
昭和六十二年三月二十八日、朝会でヤギのメリーの「学校葬」が行なわれました。当時の野田校長先生から次のようなお話がありました。

三月十四日（土）午前十時五十分、加藤獣医さんや家畜保健センターの方たちの手当のかいもなく、メリーは、とうとう亡くなってしまいました。メリーは　きっと、みんなの代わりになってくれたんだね。三年生の前田君はお母さんと一しょにメリーにバナナとリンゴを供えてくださいと言って学校に持ってきてくれました。優しい心に、先生は感激しています。今まで、わが子のように可愛がってこられた校務員の森さんや加藤先生は、悲しくて泣かれました。先生も昨夜、泣けて仕方ありませんでした。お寺さんにお聞きしてメリーの骨を入れる木箱を作りました。法名もいただきました。『釈尼上地之友メリー』です。みんなでお祈りしましょう。

こうして、学校の南門、西側の片すみに、質素ではありましたが、供養塚を作ってうめられました。その後、お花やくだものを供えたり草を取ったりして、みんなで塚を守ってきました。先日、私が、岩中町で石屋さんをしている中根輝恵さんに、この話をしたら、「そういう優しい上地っ子のためなら、りっぱな石の供養塚を寄付してあげましょう。」
と言ってくださいました。願ってもないことで、中根さんのご厚意に甘えることになったのです。
そして、さっそく、高さ一メートルほどの岡崎名産のみかげ石（自然石）を探してきてくださったのです。「供養塚」の石に彫る字は、高橋由美子先生に書いてもらいました。土台は、三津井先生・佐野先生をはじめ大ぜいの先生たちがコンクリートで固めました。こうして、

五月五日のこどもの日に完成しました。みんなの勉強に役に立ってくれた虫や鳥や魚なども、これから安心して、ここで眠ってくれることでしょう。中根輝恵さん、ほんとうにありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

お礼の言葉

中根さん、初めまして。

先日は、メリーさん、チャボさん、ウグイスさんたちが眠っている供養塚に立派なお墓を作ってくださって、どうもありがとうございました。

上地小学校で亡くなった動物たちも、

「ありがとう、立派なお墓をありがとう。」

と、天国から中根さんにお礼を言っていることと思います。

校長先生から「もうじき、お墓ができるよ。」と聞いてから、ずっと待っていました。すごく立派なお墓で、とってもうれしいです。

本当に、ありがとうございました。

飼育係　六年　小森　登志江

4年　小森八千恵

三、雪の上の小さなあしあと

―上地の昔ばなし―

すこしむかしのお話です。上地の村に、平エ門さんという人がすんでいました。平エ門さんは、いつもいつも、三善寺（さんぜんじ）のお地蔵（じぞう）さんにおまいりしていました。

「どうか、きょうも一日、じょうぶで働けますようにおねがいします。」

「ことしも地震や火事が起こりませんように。どうか、上地の村に悪い病気がはやりませんように、お願いします。」

雨が降っても、風が吹いても、忘れずにおまいりしていました。

ある年の冬のことです。その年はいつもより寒く、つめたい風がよく吹きました。

「ばあさんや、今夜はばかにひえるなあ。」

「そうですねえ、おじいさん。黒い雲が出てきたから、雪になるかもしれませんねえ。」

「こんな晩は、早く寝るにかぎる。」

平エ門さんは、いつもより早くふとんにもぐりこみました。おばあさんも、戸じまりをたしかめて、やすみました。

遠くの方で、

ウオーン。ウオーン。

と、のら犬の鳴き声が聞こえました。それから、どのくらい眠ったでしょう。どこかで呼ぶ声がしました。

「平エ門、起きてみよ。平エ門、起きてみよ。」

おじいさんは、眠い目をこすりました。（だれかがわしを呼んだようだが、こんな夜中に呼ぶはずがないな。）

平エ門さんは、そう思って、ぐっすり眠ってしまいました。すると、また、

「平エ門、起きてみよ。平エ門、起きてみよ。」

夢かほんとうか、よくわかりません。でも、こんどは起きあがりました。

「ばあさんや、今、だれかがわしを呼んだようだが……。」

「いやですよ、おじいさん。子どもみたいに寝ぼけて……。こんな夜中にだれが呼ぶものですか。」

「そうだなあ。それにしても、たしかに聞こえたが……。」

そう言って、おじいさんは、そっと、雨戸（あまど）のすき間から外をのぞいておどろきました。

「火、火だあー。」

「え？あああ、火、火……。灰小屋（はいごや）がまっか……。」

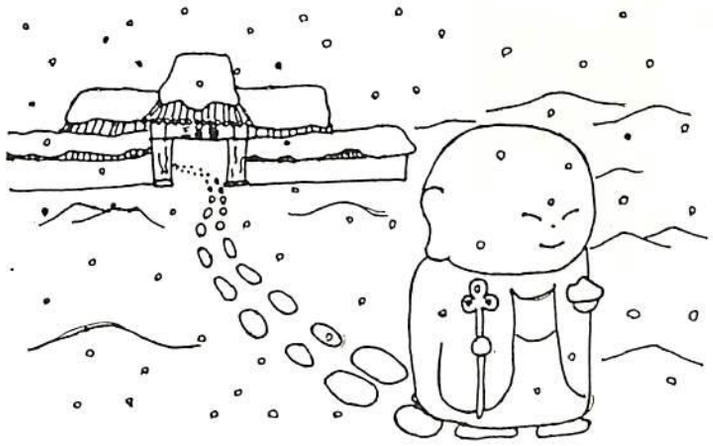
おばあさんは、腰を抜かしそうです。

「ばあさん、水、水だ。」

おじいさんは言うが早いか、はだしで外へ飛び出しました。庭のすみのかめから、手おけに水をくんで、いきおいよく火にかけました。

ジュー、ジュー、ジュー、ジュー。

「それ、もうすこしだ、ばあさん。水だ、水だ。」



6年　森久　恭

火は、白いけむりをあげて、間もなく消えました。

「ああびっくりした。」

「もし、知らんでおったら、母屋（おもや）まで火がついてしまうところでしたねえ。」

「それにしても、ふしぎなことがあるものだ。わしを起こしてくれたのは、いったい、だれだろう。」

朝、起きてみると、あたり一面まっ白な雪でした。

「おじいさん、おじいさん。ほら、雪の上にだれかの足あとがついていますよ。」

「おや、これは小さい子の足あとだ。おかしいなあ、まごの八百吉（やおきち）が起きるはずがないし。」

そう言いながら、おじいさんが、小さな足あとをたどって行きますと、三善寺の方へつづいています。

「おやおや、こんな方へ行っておるが……。」

足あとは、三善寺のお地蔵さんの前で消えていました。おじいさんは、はっと気がつきました。（ありがとうございます。ありがとうございます。）と、なんべんもおがみました。

でも、お地蔵さんは、いつものようにやさしいお顔で立っているだけでした。

「ばあさんや。ゆうべ、わしを起こしてくれたのは、あのお地蔵さんだったよ。」

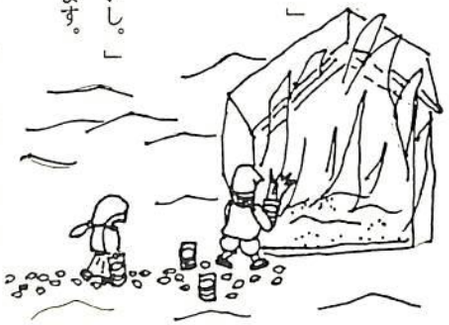
「そうですねえ、おじぞうさんが火事を教えてくれたのですねえ。ありがたいことですよ。」

おじいさんは、子どもの平一さんや、まごの八百吉さんに、いつもこう言っていました。

「わしの家は、三善寺のお地蔵さんに助けてもらったでなあ。おれいに、おぶくさんをあげることだけは、忘れてくれるなよ。」

それから、いつも、地蔵さんの祭りには、おぶくさんとして、お米を一升（いっしょう）上げているそうです。

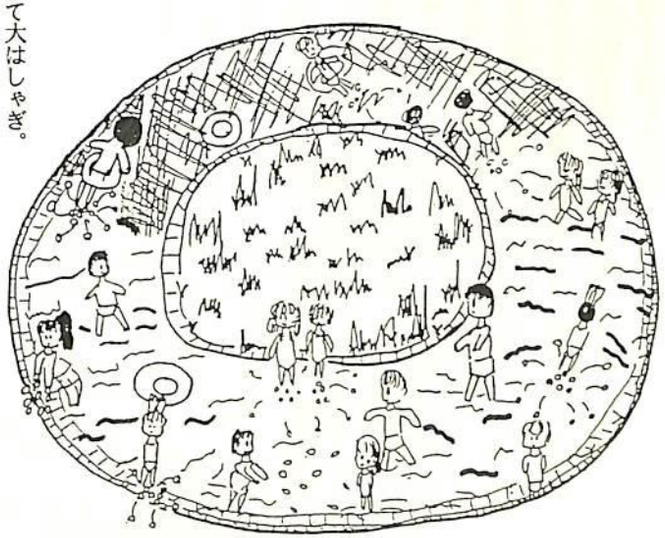
（注）これは、上地町の畔柳八百吉さんが、子どものころ、おじいさんから聞いた話をもとにしたものです。



6年　森久　恭

四、ガーデンプールに上がる歓声

「あっ、サンクガーデンが池になっちゃった。水が一ぱい入っておる！」
「いいの？ホースから水が出とるけど」
「先生、水ためてどうするの？」
「あのねえ、ここが池になるかどうか、今実験中なんだよ」
「ふうん、池にしてどうするの？」
「みんなが水遊びするんだよ」
「ほんとう？うれしい！」
「実験が成功したら、いかだも浮かべるのだよ」
「わああい」
「先生、ちょっと入っていい？」
「はだしならいいよ」
「やったああ」
一年生の子が、三十人ばかりとびこむ。キャッキャッと水しぶきをあげて大はしゃぎ。
水の深さは、わずか十センチくらい。だから、水の中でかけっこ、おにごっこも平気。ボールを浮かべたり、水をかけ合ったり、そのにぎやかなこと。
U君なんか、いつのまにか、上半身はだか。わざと水のなかに倒れて、チャブチャブ泳ぐまねをしています。
「あれあれ。ズボンも水びたしだね。こっちへきなさい。体を洗ってあげるよ」



5年　渡部　亮介

先生にホースの水を頭からかけてもらい、ニコニコ顔です。いつの間にか、高学年の子もなかま入り。一年生と手をつないで走っています。
数日後、再び水を入れ、深さは五十センチくらいになりました。
「いかだが浮くかなあ」
「インドネシアの人もいっしょに乗るのだよ」
実は五年三組の子が、算数の勉強の発展として、いかだを作って乗ることを考えたのです。
「ぼくたちは、牛乳パックを千個集めて、いかだを作ります。皆さん、家にあったら持ってきてください」
学校中に呼びかけたかいあって、牛乳パックが集まり、苦心の末、ついにいかだを完成しました。
七月六日、インドネシアの使節団が二十名、上地小へやってきました。五の三の子は、みんな水着姿で歓迎。パルマンさんといっしょにいかだに乗って、グループ毎に「けやき島」を一まわり。
「バンザーイ」
「いかだが浮かんだぞ」
まん中に立てた学級旗がひらめいています。
こんどは、どこからか食用がえるをつれてきました。二十センチもある大きいのを二ひき。かえるは、少しめいわくそうな顔をしていましたが、泳ぎは専門でスーイスイです。おやおや、カメもいっしょに遊んでいます。
野生味あふれる水遊びに、どの子の目もキラキラと輝いていました。

5年　渡部　亮介

五、おかあさんおみやげだよ

～創作童話～

「ねえお母さん、小犬かっていい？」

ケンちゃんは、今日もお母さんにたのみます。

「何回言ってもダメですよ。お兄ちゃんの時に、こりごりしたんだから……。」

前にお兄ちゃんが犬をかいました。「自分でせわをするから」と、やくそくしたのですが、いつのまにか、あいてしまったのです。しかたがないので、お母さんがぶつぶつ言いながら、せわをしていました。でも、その犬はよそへやってしまいました。

ケンちゃんは考えて、画用紙とマジックをもってきて、こう書きました。

犬のやくそく
一、まいにち、忘れずにえさをやります。
二、あさばん、さんぽに行きます。
○月○日　ケンすけ

「ねえお母さん、ボクお兄ちゃんとちがうよ。口だけじゃないよ。このやくそくをドアへはっておくよ。だから、犬かっていいでしょ。」

「しょうがないわねえ。こんやお父さんに相談してみてあげるけど……。」

子どもべやの入口に「犬のやくそく」の紙をはって、やっと犬をかうことができました。さっそく、しんせきのおじさんから、かわいい

小犬をもらってきました。うす茶色、ぬいぐるみみたいにころころしています。名前はジョンとつけました。

ケンちゃんは、朝起きると、顔を洗う前にジョンに「おはよう」と言いに行きます。ジョンはクークーいって、とびついてきます。

学校から帰ると、、ケンちゃんの姿が見えなくても、足音を聞いただけでも、しっぽがちぎれそうになるくらいふってよろこびます。

「お母さん、ジョンのさんぽに行ってくるよ。」

「気をつけてね。行ってらっしゃい。」

ケンちゃんはシャベルとビニールぶくろをもって出かけます。ジョンはもう先にかけ出して、ぐんぐんひっぱって行きます。

とちゅうでかけっこをしたり、草むらにねころんだり、だきあげてやったりします。そのうちに、ジョンがウンチをします。ケンちゃんはウンチがこわれないように、そっとシャベルですくって、ふくろへ入れます。それから、さいごに公園を二周してさんぽはおわりです。

「お母さん、ただいまあ。」

ケンちゃんは、おしりのうしろに何かかくしています。

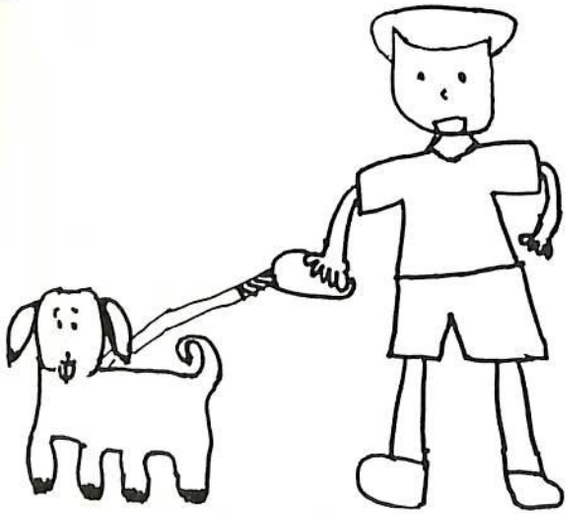
「お母さん、おみやげがあるよ。あててみて。」

「え？おみやげ、さあ何かなあ。」

お母さんは、せんたく物を取り入れていました。

「じゃあ、ボクがヒントを出してあげるよ。第一ヒント、手でもてるものです。」

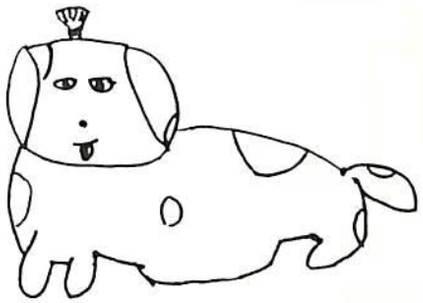
「ケンちゃんが手でもっているのね。じゃ、タンポポの花かな。」



２年　梶川由加利

「ざんねんでした。そんなにきれいじゃありません。第二ヒント、動物にかんけいがあります。」
「動物にかんけいがあるって……ええと……わかんない。」
「じゃお母さん、教えてあげるよ。ウフフ……。」
ウンチの入ったふくろを、ぱっと見せて、
「ハイ、これだよ。」
「あらいやだ、ジョンのウンチ……ワッハッハハ。」
お母さんも、ケンちゃんもそろって大笑い。
「でもねケンちゃん、えらいわね。とってもだいじなおみやげよ。まいにちもってきてね。」
お母さんは、にこにこして言いました。

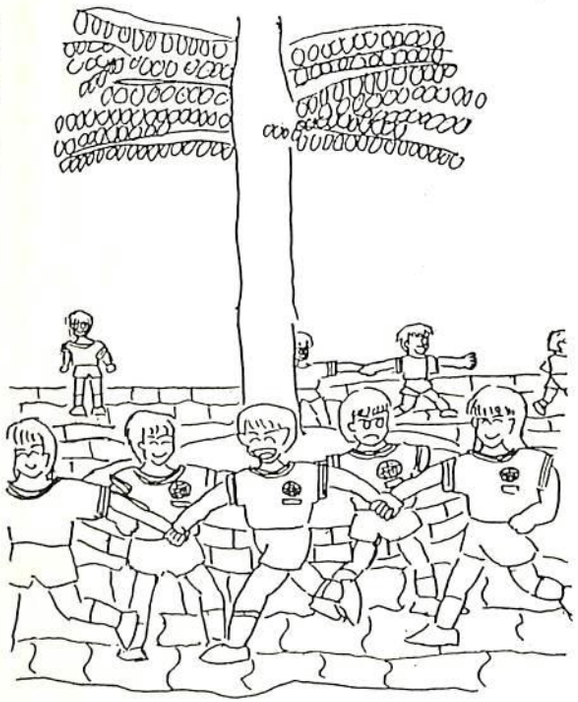
（二年生五組、梶川由加利さんの日記を参考にしました。　嶋田　稔）



２年　梶川由加利

六、十一人の友だちを迎えて

新しい友だちがふえることは、とても楽しいことです。
「ねえねえ、こんど転校生が来るって！」
「え？ホント？」
「男の子？女の子？」
「ぼくたちの班になるといいなあ。」
よそから来た友だちは、
「上地小ってどんな学校かなあ。」
「友だちが親切にしてくれるかなあ。」
「勉強の進み方がちがうと困るなあ。」
と、期待や不安をもって転校して来ます。
二学期のはじめに、十一人の友だちが転校して来ました。上地小へ来て一週間たったある日、昼の放課に校長室へ来てもらって、感想を聞いてみました。
「みんなが積極的に話しかけてくれて、うれしかったです。はじめの日から、外で遊ぼうって一しょにつれて行ってくれました。」
「男女の仲のいいクラスで楽しいです。それと、みんなニックネームで呼び合っているので、すぐ仲よしになれました。」
「バレー部に入りました。練習がきびしいけど、とても楽しいです。今、サーブの練習に力を入れています。」
「ぼくは、友だちが二十人くらいできたよ。家の方へもいっぱい遊びに来てくれるよ。」



６年　岩見　徳倫

「いつもみんなが、遊ぼう遊ぼうって、さそってくれるので楽しいよ。」
今度は、六年二組の子の日記（九月一日）を見せてもらいました。

やさしくしてあげよう

岩間　忠永

一学期、ぼくは転入生でやさしくされたので、今日来た竹原君にやさしくしてあげようと思う。きっと、ドキドキしているのにちがいないし、きっと早くみんなと友だちになりたいと竹原君は思っているのだと思う。そして、一学期、ぼくが教えられた時みたいにトイレ・げんかん・理科室など教えてあげようと思う。さあ、あしたから少しずつしゃべってあげて、そして、いろいろな所を教えるチャンスがあったら教えてあげようと思います。

四十五名でスタート！竹原暁彦君

和田　享子

新しい転入生が一人、六の二に入って来た。名前は竹原暁彦君。明るくてすぐ、みんなとしゃべっていた。でも不安なことはたくさんあると思う。親切に何でも教えてあげなければ。清掃の時間はジョンソンや松っつあんと楽しそうにやっていた。ごみ捨ての途中「ついでに竹原君も連れて来て、焼却炉を教えてあげればよかったね。」とアダッちゃん。気をつかっているみたい。今日の宿題で、竹原君のニックネームを考えなきゃいけない。ヒコちゃんと同じ名前だし、タケちゃんの名字にも似ている。困った。優しい上地っ子の心づかいに感激です。うれしい二学期のスタートです。

七、おっかさんの涙

～畔柳八百吉さんの思い出ばなし～

「八百吉、こっちへきなさい。また、いたずらをしたでしょう。」
「だって新ちゃんが……」
「人のことはどうでもいい。正直に言いなさい。」
「あのう……よその畑のスイカを棒でたたいて……」
「しょうがないねえ。今からあやまりに行くから、一しょにきなさい。」
おっかさんに手を引っぱられて、八百吉少年はいやいやついて行きました。
「すみません。うちの八百吉が、いたずらばかりして……。これ八百吉、ちゃんと頭をさげなさい。」
八百吉は、頭をさげながら、ペロッとしたを出しました。
それから三日たちました。
「八百吉というガキの家はここかあ！」
どこかのおじさんが、どなりこんできました。
「はい、はい。うちの子が八百吉ですが……」
「八百吉が田んぼの水をみんな止めちまったぞ。イネがかれたら、どうしてくれる。」
「すみません。すみません……。」
おっかさんは、いつも八百吉のことで頭をさげて、あやまってばかりいました。

6年　森久　恭

ある日の学校帰りです。

あき地で、大きい子が遊んでいました。四年生の八百吉が一人で通って行くと、さかんにはやしたてました。

「ヤーイ、ヤイ、八百屋の八百吉ヤーイ、ヤイ」

「なに?おれの家は八百屋じゃないぞ。」

「ヤーイ、ヤイ、八百屋の八百吉ヤーイ、ヤイ」

「よくも言ったな。」

八百吉はぶんぶんにおこりました。石をひろって投げつけました。

「ヤーイ、ヤイ、八百屋のカボチャにトーガン、ヤーイ」

大きい子は、はやしながら逃げて行きました。

八百吉は、かばんをそこにおいて、

「こいつー」

と言って追って行きました。そして、一ばんうしろの子のせなかを「えーい」と力いっぱい、つきたおしました。

「あっ……」

あいては、道下の田んぼへ、ぐちゃーんと落ちて行きました。

その田んぼは、深いうだんぼ（どろ田）でしたので、こしまでうまってしまいました。かおも手もどろだらけ。でも、八百吉はしらんかおして帰ってしまいました。

「あーん、あーん、ごめんよう。」

かばんもどろだらけ、きものもどろだらけです。友だちが二人で引っぱって、やっとはい上がりました。はいていたぞうりは、どこへ行ったかわかりません。泣く泣く、はだしで帰って行きました。

6年　森久　恭

「お前さんとこの八百吉が、うちのむすこをいじめた。かばんもきものも、どろだらけだぞ。どうしてくれる。」

「もうしわけありません。八百吉が帰ってきましたら、よおく言っておきますから……」

「そんなことじゃあかん。このかばんときものをどうしてくれるだー」

「すみません。あらってお返ししますから、おゆるしください。」

そのうちに、八百吉が帰ってきました。おっかさんは、にわでむしろをおっていました。八百吉は、かばんを投げこんで、また、遊びに行こうと思っていたのです。うらの戸をそっとあけて、かばんをおいた時、おっかさんに見つかってしまいました。

「八百吉、いっぺんここへきてすわれ。」

いつになく、きつい声です。

（しまった。こりゃあおっかさんに見つかっちゃったで、遊びに行けんかなあ。）

八百吉は、しぶしぶおっかさんの前へすわりました。（悪いことをしたんだから。しかられるにきまっておる。このぶんなら、二つ三つげんこつがくるかもしれん。早くしかられて、遊びに行きたいなあ。）

そう思って、うつむいて、頭をさし出していました。でも、いつまでたっても、げんこつがきません。（おかしいな）八百吉がそっとかおをあげて、びっくりしました。おっかさんが両手で目をおさえているではありませんか。

八百吉は、はっと思いました。げんこつでガーンと頭をたたかれたような気がしました。

こんなおっかさんの姿を生まれてはじめて見たのです。（ああ、おれは悪いことをした。今まで何回もおっかさんに心配をかけた。これからは、おっかさんを泣かせるようなことはやめよう。）

そう思うと、八百吉はどうにもがまんできなくなりました。わっと泣いて、

「お、おっかさあん……」

と、おっかさんのひざにしがみつきました。

おっかさんの涙が、八百吉の首のうしろに落ちました。
「お前が悪いのじゃない。おっかさんのおしえ方がまちがっていた。悪いのはおっかさんの方だ。」
そういうと、八百吉をだきしめました。こうして、親子はしばらくだき合ったまま泣いていました。

あくる日、きのうの三人が、また、よってきました。
「ヤーイ、ヤイ、八百屋の八百吉ヤーイ、ヤイ」
と言って、にげていきました。
「なにお！……」
八百吉は、げんこつをふりあげました。でも、その時、きのうのことが、目にうかんできました。
（まてよ。このげんこつをふりおろすと、またおっかさんを泣かせることになる。おっかさんを泣かせるほど親不孝な者はない。）
そう思ったら、げんこつがだんだんさがってしまいました。
「なんだお前は、急にへぼくなったな、へへへ……」
でも、八百吉は、ぐっとくちびるをかんで、がまんしました。
（そうだ、おれはもうつまらんけんかはせんことにしたのだ。）
それから、八百吉は学校から帰ると、おっかさんがむしろをおっているそばで、なわをなってあげました。そのなわで、おっかさんがむしろをおります。おり上げたむしろは、一まい一まいていねいにほします。

6年　森久　恭

夕方、八百吉が二まいずつかさねて、のき下へ積みます。
「おっかさん、ほら、おれのせいより高く積んだよ！」
「すごいねえ、八百吉が手伝ってくれるで、ほんとに助かるよ。いつもの倍くらいできたね。」
おっかさんは、ほんとうにうれしそうでした。
こうして、八百吉少年は、おっかさんの手伝いをするのが、一番の楽しみになりました。

（注）　これは、畔柳八百吉さん（七十三才）が、二年五組の子にして下さったお話をもとにして書いたものです。八百吉さんは、「私はこの時ほど、世の中で一番とうといのは、おっかさんの涙だと思ったことはありません。」と言っておられます。

6年　森久　恭

八、心をつなぐ修学旅行

十一月二十五日（金）修学旅行第一日目

「うれしくてうれしくて、寝ておれません。二時半に目がさめました。でも、早過ぎたので、また寝ました。今度は四時に目がさめてしまいました。もう眠れなくて、ずうっと起きていました。」というのは北島大介君。

ＪＲ岡崎駅から臨時列車で名古屋まで。新幹線に乗りかえ、あっという間に京都駅です。次はバスで奈良法隆寺へ。ここでやっと待望のお弁当にありつけます。このころになると、子どもたちは、もう幾日も親元を離れて、長い旅をしているような錯覚におちいります。

「いただきます。」

元気のいい声が響き、さっと包みを開きます。

「あ、手紙が入っている！」

「ぼくもあったよ。お母さんからだ。」

「わたしも入っていた！」

みんな弁当を食べるのも忘れて、くい入るように読みふけっています。

Ａちゃんへ

一人だけまい子になって、マイクで名前を呼ばれないように、みんなと仲よく楽しんでください。下着を忘れないように持ち帰ること。この手紙は午前一時に書きました。（お母さんより）

朝起きて、みんなと話に夢中になって、便所へ行くことを忘れないように。（お父さんより）

Ｂ子へ

楽しみにしていた修学旅行がとうとうやってきましたね。友達と楽しくお弁当を広げていることと思います。小学校入学以来、いろいろなことがありました。部活動、学芸会等行事での思い出、学級やクラブの係などでみんなと協力したこと等々、よくがんばって自分に与えられ役割を果たしてきましたね。もうあとわずかで小学校を卒業し、いよいよ中学生になりますが、自信をもって中学生活を送ってください。小学校でも立派にできたのですから、中学生になっても、きっと困らずにできると思います。だんだん大人になってゆくあなたですが、勉強とか毎日の生活をきちんと送るとか、自分のわがままをおさえるとかいうことは、良い大人良い女性になるために大事なことです。

お母さんは、あなたが自分を大切にし、友達を大切にし、そして、すてきな女性になることを願っています。今日はとても良い機会なので、お母さんがずっと思っていたこと、願っていることを書きました。心のすみにとめておいてください。（母より）

Ｃ君へ

楽しみにしていた修学旅行の始まり。京都の景色はどうですか。あなたが想像していたとおりですか。それ以上ですか。あなたが一生懸命作った鹿のエサを鹿たちは喜んで食べてくれましたか。とにかく事故がないように気をつけて、楽しい思い出をを心の中に、たくさんつめて、笑顔で帰ってきてください。（母より）

子どもたちに読んだ感想を聞いてみました。

・茶色の封筒に入っていて、「あっ、手紙だ」と思いました。うちのお母さん、じょうだん半分で書いてありました。「ヤッホー！楽しんでいるかーい。お弁当サンの味はいかがザンス？」なんてね。お母さんといっしょに食べているような気がしました。（磯谷香織さん）

・まさかお母さんの手紙が入っているとは思いませんでした。イカの汁で少しベトベトしていましたが、とてもうれしかったです。お父さ

んは仕事で夜中の一時ごろ帰って、それから書いてくれたそうです。

（安達由起絵さん）

・みんな手紙が入っていた。ぼくだけないのかなあ、とがっかりしていると、中の方から二通出てきて、ほっとしました。「お母さんは若い時、京都に働きに行っていたので、よく知っていますけど、お母さんの見ていない所までよく見てきてね」って書いてありました。お父さんの手紙は「歴史や社会の勉強をしっかりしておいで」と書いてありました。

（宇野　雅紀君）

・去年お姉さんが行った時、お母さんは忙しくて手紙を入れるのを忘れちゃったそうです。でも、ぼくの時はちゃんと入っていて安心しました。「おみやげ楽しみに待っているよ」なんて書いてありました。ぼくは、お父さんのタバコ入れ、壁かけ、そのほかいっぱい買ってきました。

（北島　大介君）

十一月二十六日（土）第二日目

ここは観光バスの中です。京都見学も金閣寺を最後に、終りに近づきました。ガイドさんが、にこやかに説明をしています。

「上地小学校の皆さん、京都の旅はいかがでしたか……。今日はこれでお別れですが、またのおいでを心よりお待ちしております。間もなく京都駅に到着いたします。」

そのころ、だれからともなく、

「おい、あれやれよ。」

６年　加辻久美子

「早くやらんと、駅へ着いちゃうぞ。」

という声が上がりました。

学級代表の伊庭勉君が前へ出てきました。手に紙筒を持っています。

「ちょっと、マイクを貸してください。」

といって読み始めました。

感謝状　帝産バス運転士　松尾　孝司殿

あなたは上地小学校の修学旅行で安全に運転していろいろなところに連れて行ってくれました。おかげで、ぼくたちはとても楽しく過ごせましたので感謝状をさしあげます。

昭和六十三年十一月二十六日

愛知県岡崎市立上地小学校六年一同（拍手）

―次はガイドさんへ―

感謝状　帝産バスガイド　戸田　春美殿

あなたは上地小学校の修学旅行で一日中楽しいガイドをしてくれました。私たちは小学校生活で最高のいい思い出をつくることができましたので感謝状をさしあげます。

昭和六十三年十一月二十六日

愛知県岡崎市立上地小学校六年一同（拍手）

６年　加辻久美子

運転士さんは、わざわざ帽子をとってマイクを握り、この小さなお客さんにお礼を言いました。ガイドさんも驚いたり感謝したりで、し

ばらく声がでませんでした。

十一月二十八日（月）職員室

日曜日一日ゆっくり休み、みんなさわやかな顔をして登校。教室では修学旅行のみやげ話でもちきりです。

職員室へも子どもたちから、心のこもったおみやげが届けられました。いつも、授業に来てくださる先生にも、クラス全員のお礼の手紙と京都名産「五色豆」を買ってきてくれたのです。その中の一部を紹介します。

松原先生へ

「修学旅行の時は、送り迎え、寒い中ありがとうございました。いちばん心に残ったのは金閣寺です。松原先生は、いつも私たちにいろいろな楽しいお話を聞かせてくださって、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。」

（清水　章代）

「楽しい修学旅行も終わりました。修学旅行での思い出は、旅館でのまくら投げ、夜のトランプ、星を見ながら寝たことなどです。まくら投げをしていると、青山先生がビデオをとりにいらっしゃいました。私たちがおみやげを買ってきました。もし、よろしかったらどうぞおめしあがりください。」

（荒田　梢）

「この手紙はお礼の手紙です。教室に来てすぐしてくれるのは、松原先生のお話。あのお話をいつも楽しみにしています。お礼として修学旅行でおみやげを買いました。へやで一人十円出してください、と代表の子たちが言って、ぼくは二十円出したら、あとで十円でいいですと返されました。おみやげはお金ではなくて気持ちだなあ、と思いました。」

三津井先生へ

（太田　雄仁）

「三津井先生、今までぼくたちが習字の授業で、しゃべってばかりですみませんでした。修学旅行の早朝の見送り、寒い中のお迎えありがとうございます。五色豆は、ぼくたちのおわびとお礼です。これからもよろしくお願いします。」

（川越壮一郎）

「ぼくたちは習字での迷惑もあるし、科学部でもおせわになっている。おわびにみんなでお金を少しずつ出し合い、先生のもいっしょに五色豆を買いました。前に習字道具を大ぜい忘れたりしました。すみません。どうか食べてください。部活もこれからもよろしくおねがいします。これからは忘れないようにします。授業中ぐちゃぐちゃしゃべらずに、ちゃんとけじめをつけて、おっしゃったことをして、変な気持ちにならないようにします。」

（鈴木　史朗）

「習字の時間に楽しいお話を聞かせてくださったり、一生けんめい授業をしてくださってありがとうございます。いつも迷惑をかけていますが、三津井先生がいらっしゃらないと、字が上手になりません。修学旅行、とっても楽しかったです。習字の時間にもいろいろと話したいことがたくさんあります。これからも楽しく教えてください。お願いします。」

（松尾　裕次）

九、笑顔で実行

九百十五名の上地っ子が、元気よく新しい年を迎えました。去年の大活躍を思い、今年の発展を願って合言葉を作りました。

う　うえを見つめて
え　えがおを忘れず
じ　じっこう第一

5年　横井英里子

「上を見つめて」というのは「希望」をもってということです。苦しい時でも、さわやかな「笑顔」を忘れず、口よりもまず「実行」。こうすれば、もっともっとすばらしい上地小学校になることまちがいありません。

さて、今年はヘビの年ですね。ヘビというと、きらいな人もたくさんいますが、やたらにこわがることはありません。昔から「ヘビの皮をさいふに入れておくとお金がたまる」といわれます。えんぎがいいのですね。ヘビを「神さまのお使い」として祭ってあるほこらもあります。

また、「家や屋敷を守ってくれる」といって、ヘビがいることを喜ぶ人もいます。去年紹介しましたが、上地町岳井の一本杉の根本にも「白ヘビ」がいたそうです。加藤信太郎さん（八十五才）の話を聞きましょう。

一本杉の根本に、何をするのでもなく、じっととぐろを巻いていた。人にかみついたりして危害を加えなかったので、親から絶対に殺したり、いじめたりしないように教えられていた。

おもしろいことに、時々近所の屋敷に遊びに出かけ、家の庭にも来ていたんです。一度見たら忘れたり間違えたりということは絶対ないと思う。

「バナナよりも少し細い」「長さは一メートルといったところ」だそうです。

昭和五十八年に一本杉が切られてからもよそで見たそうです。

今でも、きっとどこかの穴の中で、ひっそりと上地の町を守っていてくれるような気がします。

5年　羽原美恵子

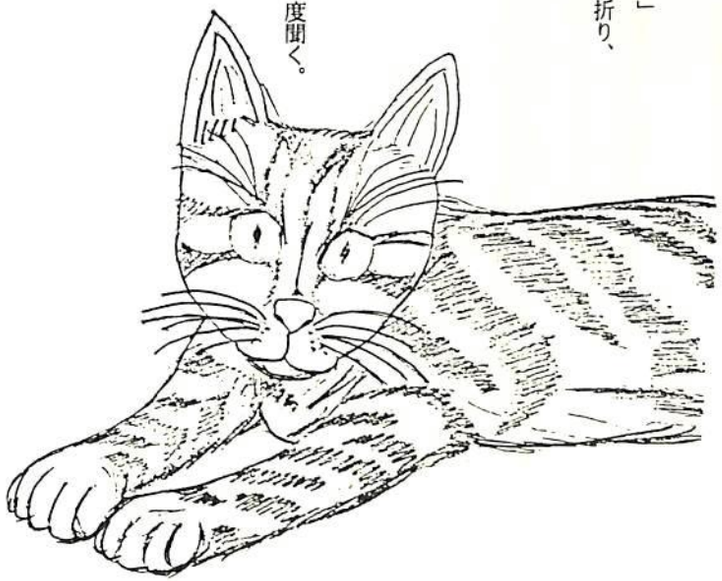
十、ムツゴロウ少年との交流記

これは保護者の方が、ある少年とふれ合ったご自分の体験を、物語風にまとめたものです。
全然顔も知らず、縁もゆかりもない一少年に対し、このように温かいまなざしを送り、励ましてくださる心情を本当に有難く思います。
T君はこの出会いを通して、将来への夢をさらに大きくふくらませたことでしょう。このような地域の方に見守られ、声をかけられ、上地小の子どもは伸びて行きます。何年か後、たとえ、ふるさとを離れることがあっても、こういう「ふるさと」の「ここころ」は、いつまでも残ると思います。（紙面の都合で要約してあります。）

わたしは「学校だより」十二月号でT君の動物に対する純真な心に感動した。そして、こんな子なら、ぜひ一度会ってみたいと思った。
「もしもしT君ですか。」
「はい、Tです。」
はきはきした声と、ていねいな言葉づかいに、お母さんのしつけのよさが分かった。
「ねえT君。もうじき引っ越すって？その前に遊びにきて、家のネコを見て欲しいなあ。飼い方なんかも教えてよ。」
「それでは、『ネコの飼い方』の本なんか持って行かなくてはいけませんね。」

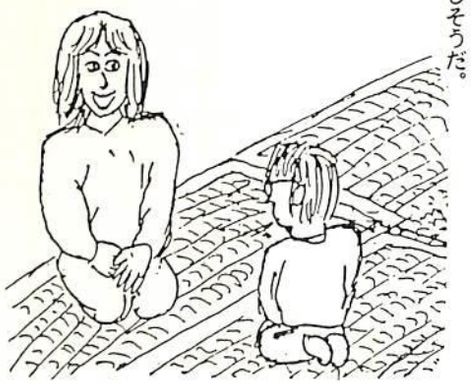
とT君は大人びた口調で言ったのでおかしかった。
「いつごろが都合がいい？」
「普通の日は部活がありますので、遅くなりますが……」
「土曜日なら、何時ぐらいに帰ってこれそう？」
「はい、土曜日も部活はあります。三時半には終わります。すぐに帰っても三時四十五分ごろですね。」
私は、三時四十五分なんて遅くなっちゃうから、部活を一回ぐらい休めばいいのにと思ったが、まじめなT君の言う通りにした。T君は私の家を知らないというのでKストアーの前で待ち合わせることにした。
「もしかして都合が悪くなったら電話してね。」
「いいえ、都合悪くなることはありません。」
と言ったので、またおかしかった。
私は、T君がうちのネコのニャン吉を見て、
「ウーン、これはいいネコですね。」
と、一言ほめてもらいたいために、三日前からシャンプーをしてやり、毛につやが出るえさを与えた。そして、心の中でニンマリした。
（これならだれに見られてもはずかしくない）
約束の土曜日が来た。
私は買い物帰りに待ち合わせの場所に行くと、看板につかまり、足で地面をけっているT君を見つけた。
（もう来ている。まじめなんだ。）と、思う。
あの時、電話で「都合悪くなることはありません」と言い切った声を、その後ろ姿に思い出した。
「ごめん、待った？」

「そうでもありません、四十分に来ました。」
と、T君は正確である。
家に着いた。さっそく、
「ニャーちゃん、上地小のムツゴロウさんよ。だっこしてもらいなさい。」
と、探したが、ニャン吉、知らない人が来ると体をできるだけ縮めて耳を折り、尾を巻いてテーブルの下へ逃げてばかり。
「とろいねえ。この人は優しい人なんだよ。」
と、家の中を追いかける。T君はニコニコして見ている。
「まあ、そのうちになれますよ。」
「ねえ、ちょっと見て、どう?うちのネコ。」
「チャトランそっくりですね、トラの模様がはっきりしてますね。」
そうこうするうちに、ネコがやっとなれてきた。私はだき上げ、もう一度聞く。
「ねえ、このネコどう思う?」
「そりゃ動物はみな可愛いもんですよ。」
「……」(少々期待はずれ)
「ぼくは絶対、動物にかかわる仕事をしたいです。」
「じゃあ、獣医になって動物園で働いたら?」
「そうですね。それには勉強しなくちゃ。」
なんてうらやましい、たのもしい言葉をこの子は自分から言って。



6年　森久　恭

「二十一世紀まで、あと十一年、その時、T君は二十一才かな。」
「ぼく、受験勉強しているかな。」
「受験は十八か九でしょ。君はもう立派な大学生よ。獣医の勉強していると思うよ。」
「一次試験あるでしょ。」
「そのころは、もうないわ。同じレベルの人をたくさん作ってもしょうがないわ。それぞれ得意な分野で好きなことを一生懸命勉強すればいいのよ。例えば、君のような動物学者とか、美術の好きな芸術家。そのほか音楽家とか考古学者とかいっぱいあるね。好きな道でがんばらせる方が日本の文化のためにいいから。文部大臣も共通一次試験をやめたと言っていたよ。」
「へえー、そんならいいけど。」
この子は本当に将来のことを考え、勉強している。高校生と話しているような錯覚を起こしそうだ。
T君の澄んだ瞳。これは純真な心の小窓だ。
「ぼくの家でドーベルマンという大きな犬を飼っていて、名前をドンといいます。ドンは首領のことですが、このごろはドジなドンです。ぼく一人ではとても散歩できないので、お母さんとします。犬は一年たつと十八才で一年過ぎる毎に五年加えるんです。ネコの年令はよく知りません。」
「よく知ってるね。私ね、サーブの話聞いてから、セパード犬がいいと思ったけどよその人がこわがるといけないので、柴犬か雑種の小さいのがいいなあ。」
「それはかしこいですよ。」
と、ここでも大人びた口調でズバリというたのもしさ。
「犬は声でキャンキャンいって表現するだけど、ネコは態度で表わすのでおもしろ



6年　森久　恭

いよ。この前ね、のらネコが庭を通ったら、うちのネコ体中の毛を逆立ててしっぽを二倍ぐらいにふくらませて『ウウー』って怒ってね。手足がほんの少ししか床についておらず、今にも飛びかかれる姿勢でね。威かくしているのね。」

と、私がネコになりきり「ウー」とか「ハー」とか言って物まねをしたら、T君は笑いころげた。私もおかしくなって、二人でしばらく笑い合った。

そうこうしているうちに時間がたった。ネコが所かまわず引っかいて困ることや、便のしまつなど教えて欲しかったけど、話が横へそれて聞く暇もなかった。

「お母さんが心配されているから、もう帰ろうね。」

「はい。」

歩いてさっきの場所まで送って行く。

「家が分かったから、いつでも遊びに来ていいよ。」

「はい、また来ます。」

T君は始終「〜です。」「〜ます。」とていねいな言葉づかいで話してくれた。本当にしつけのよい子だと思う。信号の所まで来たので「じゃ」といって次に私がいおうとした言葉を先に言われてしまった。

「今日はありがとうございました。では気をつけて帰って下さい。」

とエスコートまでしてくれて。

私はあいた口がふさがらず、返す言葉もなく、ただ手を振るのみだった。

上地小には、こんなに心優しい子がまだいっぱいいる。どうか、すなおにたくましく伸びてもらいたい、とT君の後ろ姿に祈った。

その後ろ姿を見ていたら、私がかつて愛唱した歌が思い出された。

一、生きている鳥たちが
　生きて飛びまわる空を
　あなたに残しておいてやれるだろうか　父さんは
　目を閉じてごらんなさい
　山が見えるでしょ
　近づいてごらんなさい
　こぶしの花があるでしょ

二、生きている魚たちが
　生きて泳ぎまわる川を
　あなたに残しておいてやれるだろうか　母さんは
　目を閉じてごらんなさい
　野原が見えるでしょ
　近づいてごらんなさい
　りんどうの花があるでしょ

三、生きている君たちが
　生きて走りまわれる土を
　あなたに残しておいてやれるだろうか　母さんは
　目を閉じてごらんなさい
　山が見えるでしょ
　近づいてごらんなさい
　こぶしの花が見えるでしょ

6年　森久　恭

十一、トラとりゅうがおどった

～力いっぱい表現運動～

「へぇー、すげえなあ。」

「トラとりゅう、どっちが勝つのかなあ。」

「学校だより」一月号の「絵からぬけだしたトラとりゅう」を読んだ感想です。三年一組（守山学級）の子にもう少し聞いてみました。

・りゅうとトラがけんかして、田んぼがめちゃくちゃ。村の人はこまっただろうな。めいわくかけたから目を黒くぬっちゃった。これでもうあばれないね。（後藤未奈さん）

・りゅうとトラがけんかして、田んぼをあらしたから、村の人たちが相談するのはあたりまえだと思います。（津曲清利君）

・絵からトラやりゅうがぬけだすなんてほんとうかなあ。でも、私はこういう話がすきです。村の人たち、天じょうで目玉が光ったときびっくりしただろうなあ。（杉浦志帆さん）

・りゅうが出て、あばれるところを村人に見られたから、村人たちが食べられてしまうかもしれないと、どきどきしました。スリル満点です！（遠藤陽子さん）

・ぼくは上地にひっこしてきたから、むかしのことは何も知らない。りゅうが勝ったのか、トラが勝ったのか知りたい。ぼくは、きっとりゅうが勝ったと思う。（吉村浩一君）

「このお話のトラの絵がいまでもありますよ。」

「え？先生、どこにあるの？」

「上地の早川さんというお宅です。」

「見たい、見たい、先生つれて行って。」

というわけで、三年四組（鈴木尚子学級）では、社会科の授業として見学に行くことにしました。四十分近く歩くのですが、子どもたちは平気です。

上地町下屋敷六十二番地が早川さんのお宅です。

「広いなあ。」

「木がいっぱいあるね。」

早川博さんは、にこにこして大ぜいの孫たちを迎えてくれました。

「上地小学校三年生のみなさん、遠いところをよく来てくれましたね。」

と言って、喜んでお話してくださいました。

「トラはとっても強い動物ですね。むかしの人は、悪者から村を守ってもらうためにトラの絵をかいたのでしょう。それからこのへんは土地が低かったので、台風やあらしですぐイネがくしゃくしゃになる。それをりゅうがあばれたと思ったのかも知れませんね。」

早川家は博さんが第十二代目で、六代目の斯伊（ときただ）という人が画家で、たくさんの絵を残しているそうです。

「では、こちらへどうぞ、これがそのトラのふすま絵です。」

「わあー」

「すごーい」

「大きいーい」

「ほんものみたい！」

「あ、目が黒いよ。」

「目つぶししたんだね。」

3年　竹谷　明人

帰り道も、教室に入ってからも、この話でもちきりでした。
「トラとりゅうと、ほんとはどっちが強いのかなあ。」
「そりゃりゅうだよ。りゅうは空をとべるけどトラはとべんもん。」
「だってわからんよ、トラだって力は強いし、歯もすごいし……。」
今度は、この話を紙芝居にすることにしました。グループに分かれて場面ごとにさっそくかき始めます。もうみんな夢中です。図工の時間も、あっという間に終わってしまいます。「残ってかきたい」というので、授業後も続けられました。
そうすると、次は発表の練習です。
「ウォー、ウォー」
「それにしても、こまったもんだ。」
と気持をこめた声。
「ジャンジャンジャンジャン」のところでは、本物の鐘（どら）を打って雰囲気を出します。発表会は、どのグループも大熱演でした。
放課になると、もうトラやりゅうにヘンシン（変身）して遊んでいます。
「わあー　わあー」
「ガオー　ガオー」
「やっつけろ！やっつけろ！」
とんだり、はねたり、ころがったり。顔付きもけっこう真に迫っています。
「みんな、この話がとても気に入ったようですね。」
「うん、とってもおもしろい。」
「りゅうになってみたい。」

3年　尾上　浩一

「トラみたいに強くなりたい。」
「じゃ、体育の時間に、トラやりゅうになって遊びましょう。」
「わあーい」
「先生、ほんとうにやるの？」
「ぼく、りゅうがいい！」
はり切って始めたものの、そうかんたんにトラやりゅうになれません。転がる、ねじる、走る、とぶなどの特訓があります。指先の動き足先の動きまで気をつけて表現することは初めてです。
「先生、早くトラをやらせて。」
「だめだめ、これをやらないと強いトラになりませんよ。ハイもう一回。」
先生も子どもも汗だくだくです。
二月二十日、三年四組の体育の研究授業で発表することになりました。早川博さんにも、案内状を書きました。

・たからもののトラの絵を見せてくれてありがとう。トラの絵がほんものみたいでおどろきました。ぼくは、トラの絵を見てダンスをやる気になりました。力いっぱいやるので見にきてください。（河本勝敏君）
・この間は、おじさんたちの大切なものを見せていただき、どうもありがとうございました。二月二十日（月）一時半からみんなでかみしばい作ったりして、できたダンスをやるのでぜひ見にきてください。トラを見せてくれたかわりに、ぜひ見にきてください。みんなでまっています。おじさんたちがびっくりするくらい、がんばってやります。どうか、これたらきてください。おねがいします。
（中垣まどか）

体育館へ行ってみると、女の子は、何とレオタード姿。よく見ると、水着とタイツでしたが、口々に、「先生、にあうでしょう」と得意顔で大はりきり。以下、教務主任の松原先生の「教務通信」から引用させてもらいます。

二十日（月）鈴木依治先生を講師にお迎えした今年度最後の授業研究。第五時、体育館で鈴木尚子先生による「表現運動」の授業が始まりました。水着を身につけた女の子。半袖姿で汗をにじませて動き回る男の子。指導に当たる尚子先生も息をはずませ、子どもたちと一体となってリズムに乗り切っていきます。授業展開の「準備と指向」の八分間があっという間に過ぎてしまいました。

七つのグループに分かれた子どもたちが、いよいよ「トラとりゅうが激しく戦う様子を表現」しようと、動きづくりに入っていきます。「子どもたちが座って相談しないように配慮」した尚子先生の指導の成果でしょう。体で考え、体で創作する子どもたちです。直ちに、「トラとりゅうの戦いの表現」がかけ声を伴って、力強く展開を始めました。

「先生の顔つきがそのまま子どもに乗り移り、生き生きと学習が進んでいった」「早川博さん宅まで出かけ、合科的な試みも大胆に進める中での子どもの生き生きとした表情」「動きに子どもの言葉も取り入れた活気に満ちた授業だった」等、授業後開催した全体協議会で、参観した先生たちからも共感の意見が相次いで出されました。

協議を総括しながら講師の鈴木依治先生は本校研究推進について大きな節となる貴重な講話を下さいました。

「生き生きとした子どもを育てるための上地小学校の地道な成果を目の前にして素晴らしいと実感している。子どもの『我執』をそのままにせず、足らない部分や過った考えには深い愛情をもって教育をしていくことを避けてはならない。教師自信が己に謙虚で、子どもを徹底して信じていくこと、子どもの内にある力を辛抱強く『待ってやること』が大切だと思う。先生は子どもたちの『がき大将』になって、後に続く子どもに責任を取り切る気概が必要で、こうしたことが土台になって生き生きと活動する子どもたちが育ってくるのではないか。上地小学校の今の行き方に自信をもって進んで下さい。」

最後に、授業の感想を子どもたちに聞いてみました。

・今までで一ばんうまくできたと思う。あせもだらだら出た。（中嶋ちひろさん）

・せい一ぱいやれたと思う。だけど、もう少し班で話し合えばよかったと思う。（大城歩さん）

・はあはあいうほど一生けんめいできた。たたかいの所も力強くできた。くもや雨や風にへんしんしてできたからよかった。（三石直和君）

・他のグループのひょうじょうがよかった。（杉田妙子さん）

・みんながきょうりょくしてくれた。とてもたのしかった。そくてんをやってよかった。（河口美加さん）

・たのしかった。話し合いが下手なので、もうちょっとスムーズにやりたいと思った。（羽原昌子さん）

・研究じゅぎょうをもう一回やりたい。（上坂亜希子さん）

・おわった時、先生方に「ありがとうございました」と言ったらスカッとした。（久野佐枝子さん）

三十七名中「力いっぱいやれた」と自己評価している子が三十五名。「まあまあ」が二名。早川博さんは都合が悪くおいで頂けなかったが、次の完成発表会には、きっと来てくださると思います。ともあれ、「生き生きとした学習」をめざす本校の研究が一歩深まったことを喜んでいます。

3年　丹下　聡美